

作東の文化

No. 29

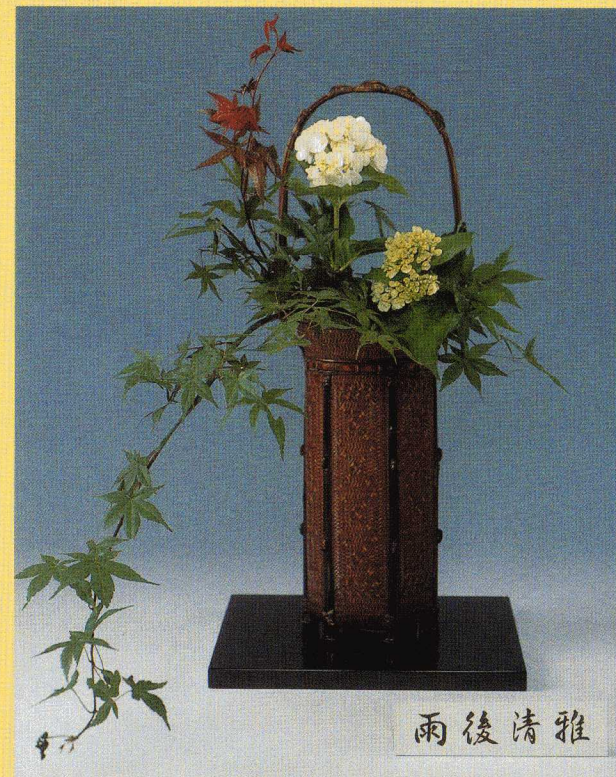


日本画 安東靖子

平成 15 年 10 月 15 日

作東の文化

No.
29



雨後清雅

作東町文化協会

山文の表紙

目次

巻頭言 地域文化の向上……………圓東順一……………1

特別寄稿
私の長養法……………阿部雲魚……………3
一貫清水のこと……………岡田千茶……………4
石の時……………井口克己……………5

所感寸言
回り道の楽しさ……………井口祥子……………8
心は気持……………清田三智子……………9
よきことば……………江見和巳……………10
落陽……………原田順子……………11

随筆随想
我家の家族犬二ひき点描……………中田澄子……………13
老いのたわごと……………吉政実夫……………14
五十年ぶりの同窓会……………光井和彦……………15
言葉にすれば……………原洋一……………16
父と城の石垣……………田中清一……………18
小さな旅の思い出……………岩本敏子……………20
折り紙の奥の深き……………保利龍男……………21
ホトトギス……………井上健一……………23
福山小学校思い出の記……………春名貞女……………24

江戸俳諧三巨峰……………黒薺貴……………27

歴史紀行
御鏡騒動記……………吉政実夫……………30
宮本武蔵と津山のお城……………衣笠隼巳……………32
「江見廃寺」と「高本遺跡」の再検討
英多郡家は英多郷の何村にあった？……………加藤芳英……………33
片伏・日向(土居)の七人塚について……………井口岩勝……………35
太陽と鳥居の関係……………横山征彦……………37

短文芸
賀初日高原台……………光辻猛美……………42
紫陽花……………本田あきゑ……………42
ここは作東くにざかえ……………小林亨……………43
兄ちゃん(七兄への詩)……………田中清一……………44

俳句
夕蛙……………青山元江……………45
初螢……………山本登山……………45
兄と弟……………遠藤綾女……………46
野菜作り……………加藤美雪……………46
芥子坊主……………長家克子……………46
田植水……………坂井はつ子……………46

表紙説明

題「雨後清雅」生花

この「いけ花」は嵯峨御流の文人華といい、題意は、驟雨一過の青葉楓のすがすがしい情景に漂う、余情感溢れる清らかで上品さに想いを託したものです。

長家清甫

日 6 1 月 0 1 年 2 1 期 平

花ハツ手	高橋やえ子	47
秋近し	森本久子	47
梅雨晴れ間	杉本幸子	47
道	坂部金治	47
田舎も佳し	山下照夫	48
俳句五句	安東和子	48
春めける	井口祥子	48
座右の書	宿野淑子	49
茅の輪	江見和巳	49
絵馬	春名波留夫	49
春夏秋冬	原田順子	49
廃城令	春名静山	50
猫	黒薺貴	50
大夕焼	山本緑	50
川柳		
柱	春名静山	51
燕の巢立	江見和巳	51
雨	山本昌子	52
那岐ごめん	小林亨	52
明暗	山下照夫	52
話のたね	衣笠隼巳	52
身内悲喜	山下光子	53
愚痴	遠藤綾女	53

八十路坂	春名房代	53
日本男児	山本登山	53
合併	黒薺貴	54
男と女そして仏	原洋一	54
短歌		
風にひよろめく	三木泰葉	55
魅せられて	原洋一	56
青き銀杏葉	加藤幸子	56
折り折りに	安室舜海	57
八咫の鏡	江見和巳	57
赤蜻蛉	春名静山	58
亀	黒薺貴	59
「不快」と「感謝」	山下照夫	59
思ひのままに	横山昌子	60
忘ることなし	加藤保子	60
牛蛙	杉本幸子	61
今生の別れ	小林亨	61
孫寿き	山下光子	62
ささやき	鳥形節子	63
折折に	石生さだ子	63
故郷	荒尾や志ゑ	64
収穫の一日	船曳利津	64
ふるさと	角利津	65

光ともせむ	小林増代	65
さはやか五月	角南三津ゑ	66
わが里	安西苑	66
紫陽花七変化	森本久子	67
草もみぢせり	横山すみ子	67
四国遍路のつれづれに	名部和子	68
早春	新井和代	68
白き連峰	名部みどり	69
折に触れ	鈴木秀子	69
われも生きて	原幸子	70
リハビリの思ひ出	光井つや子	71
アルバム	岩本敏子	71
般若寺	宿野和穂	72
七色の花	山下三代子	72
きづな	名部下子	73
熊野	入矢敏江	73
節分草	加百由起子	74
ふゆぎくら	日下智加枝	75
猪よ	横山美恵子	75
せん	奈摘葉	76
わが邑	黒石登代	76
母	江見真智子	77
働哭に似る	北村和子	77

夫	新免初子	78
紫色の花	長澤和枝	79
折をりに	黒石貞子	79
一寸先は闇	阿部すみゑ	80
谷渡りゆく	中川富美枝	80
乾杯	末宗千歳	81
遍路	徳野富美子	81
いくさの世紀	坂井はつ子	82
春の光	森本かよ子	83
桜	谷名保美	83
拒めるごとく	関内惇	84
小説		
母の遺言	長瀬加代子	85
専門部活動報告		
棋道部の活動について	横山廣志	96
作東町文化協会会則		
平成14年度 作東町文化協会事業報告		98
平成14年度 作東町文化協会決算報告		100
平成15年度作東町文化協会会員・役員名簿		101
編集後記		102
〈資料〉 作東町歴史年表		114

〔巻頭言〕 地域文化の向上

会長 圓東順一

昨年より、バレンタインホールの両サイドに文化協会の会員の作品を展示することにした。このことは、町当局の要請でもあり、会員の発表の場を求める熱意でもあって実現した。

公社が公募する「愛の美術展」及び「写真展」等の展示以外は、年間会員の作品を展示することにした。専門部を十一部門に分け、大体一か月単位で展示するようにしている。

絵画や書、写真等は、秋の文化展と、春の書画写真展の二回であったが、ホールに展示するようになって負担が多くなった。他の部門の方も、一回が二回になり同じように負担が多くなった。然しそれだけ発表の機会が多くなったことは、張り合いが出来たとも言える。

ホールの両サイドに、どこかの部門の方の作品が展示されているということは、訪れた方の目を引くと共に、楽しませてくれる。町内の方ももちろん、町外の方も、たびたび足を運んでいただくことにもなる。十一部門にわたって展示しているため、訪れるたびに変わった作品を観ることができ、町内の方は、名

前と作品を観て、色々と思いをめぐらすよるこびもある。

作東の美術館は、最近、ペイネ以外の方の特別展を企画され、足を運ぶ人も増えていることと思う。ホールの両サイドと、美術館の両方の作品を鑑賞することが出来ることは話題も増え、楽しいことである。

今年、NHK大河ドラマ「武蔵」で連日観光バスで大変である。いずれ大原町の武蔵の生誕地行き帰りの車であろう。生誕地には新しく「武蔵美術館」も誕生している。

また県立美術館では「武蔵MUSASHI 武人画家と剣豪の世界展」と題した「特別展」が開催されている。これも連日大盛況のようである。

また、井原市では、町制五十周年の記念として「平櫛田中の彫刻展」が開催された。田中の最高傑作の鏡獅子を始め、普段は目にすることの出来ない数々の作品が展示された。このように、身近なところで、先人の優れた作品にふれることの出来ることは、ほんとうに幸せなことである。

近隣の美術館でも色々な特別展が催されている。

このように、すぐれた作品を観る機会はいくらでもある。多くの作品に出会い、作者の意図するところを理解し、自分の作品に生かし発表し批判をおおぎ、地域文化の発展向上に貢献したいものである。

特別寄稿

私の長養法

阿部 雲魚
(岡山市 書家)

私は、生れた時から弱い性で生れた。

幼時は「引きつけ」で両親が心配し何時迄生きるだろうかと心を砕いた風に父の記した「正登の教育」に書いて居る。学校時代は運動こそ下手だが休まずに通った。不便な土地だったのでよく歩くので丈夫になった。青年期は宮林署で山歩きで足腰を鍛えたのでよかった。後に官を辞し会社も退いたのが終戦と一緒に、一応故郷の田舎に帰り、半農生活に入った。労働の酷しい割合に、食物の不充分が禍して、肺結核になり八年間無収入で難儀をしたが、故郷の人々の温情に浴しつつ兄弟達にも世話になりながら書道生活をした。清貧極らない生活であった。独居安静の日々は、その昔教を受けた川合信水師の教えと父母の恩愛の訓が役立って、今日も感謝の外は無い。それに郷里自然の中に包まれた中、親族、友人、知己の恩情は一日として忘れられない。只、有り難い極みである。

その多くの援助の支えの中に私自身も心して平素から気をつけて一日一日を大事にして来た。その一端を列記すれば大方次の様である。

- 一、自然の中の恩愛(感謝)
- 一、両親、親族、友人、知己の恩情(感謝)
- 一、物心俱に深く求めないこと(名利)
- 一、趣味生活に生きること(書、画、短歌)
- 一、散歩(毎日一時間以上)と自由体操、外に体を動かす
- 一、食物は菜食を主とし少食とする
- 一、酒、煙草は厳禁(コーヒー、紅茶類も)
- 一、間食をせず、毎日牛乳と茶を沢山飲む
- 一、早く寝て、早く起床すること(晚九時半就床、朝五時起床)
- 一、日々読書(新聞、雑誌、専門書外)
- 一、歌を大声で唱う

- 一、一病息災(糖尿病)日々用心
- 一、人と談話し心を放つ
- 一、排便に気をつける
- 一、睡眠(心配事を無くする)

書き挙げて見ればこんなに沢山になる。

貝原益軒の養生訓にも大体こんな事が記述してあるが、

(二〇〇三・六・四記)

一貫清水のこと

岡田 千茶
(朝日新聞岡山柳壇選者)

今年NHK大河ドラマ「武蔵」のおかげで、宮本武蔵の出身地、大原町には連日観光バスがやって来て、武蔵の生家のあたりの賑わいは大変なようである。

ドラマの原作者吉川英治は大原町宮本を武蔵の生誕地とし、ドラマも勿論その通りに描いているが、出身地には異論があつて、兵庫県では播州だと言われている。

しかし司馬遼太郎の中編小説「宮本武蔵」(朝日新聞社刊)にも『むろん播州人の錯覚である。武蔵が出た村は播州との国さかいかいにあるも播州には所属していない。ただ母親が播州人であったという、とすれば播州人の血が入っているかもしれない』とこの説を否定している。

尤も養子の伊織が播州人のようであるから、武蔵も同

じと思われているのではないかと、これは私見である。大原町から兵庫県へ通じる釜坂峠にある一貫清水の脇に、地元讚甘神社の隣に生家がある故人の白岩文衛さんの川柳句碑

一貫清水武蔵は里とふり返り

がある。

一貫清水は、武蔵が故郷を後に修行の旅に出る時、竹馬の友、森岩彦兵衛と別れを惜しんで、共にこの清水を飲んだと言われており、これを詠んだものである。

以前何かにこのことを書いたら、久米南町の泰西寺住職で川柳作家の長谷川紫光さんから「一貫清水は作東町にもあるよ」と教えられた。そこで『作東町の歴史』昭

和四十二年刊で調べてみた。

『江戸時代も末期の、ある夏の日、長州藩毛利家の飛脚が、出雲街道を大坂へ向けて走っていた。その往来べりの大字川北字清水の元には、昔から他では味わえない清涼な水が湧くので、地元の人「金水」と呼んで大切にしていたが、その飛脚はこの水で充分渴いた喉を潤して、一服ののち出発した。

三日月まで行った時、懐にしていたはずの一貫匁のぜにのないことに気がついた。「そうだ、あそこで水を飲んだ時、木の枝に錢袋をかけたまま忘れて来たわい」と思ったが、ええままと、そのまま大坂までとんだ。

そして、その帰り清水の元を通りかかったので、水を飲みがてら立ち寄ってみると、まさかと思つた錢袋があつた。よるこ

んだ彼は、それを押しただいて懐に戻した。

正直な土地の人と金泉の話は、たちまち街道筋の噂の種になり、誰言うとなく金泉のことを一貫清水と呼ぶようになった。

それ以来一貫清水は長く庶民の喉をうるおし、今は宿野修一氏が管理して、やはり重要な水源になっている』と書かれている。

現在も在るのだろうか。

宮本武蔵と森岩彦兵衛の友情。正直な作東の村人たち。一貫清水にまつわる心温まる二つの話。

大原には「宮本武蔵生誕の地」の碑の脇に、大森風来子の川柳句碑

二刀流育つた山のまるい里もある。

石の時

井口克己

(東京都・詩人)

石は心臓の中にうまれる

大きくなるために望みある英気を吸いあつめて

石の表には都市のゆがんだ風景が映っている

白の天と黒の地と表情のない人の顔が

都会の風は吹きひろがり村の領域に食いつく

石は石で有り続けるとは限らない

石の中には村のながい時が流れている

緑の森とすんだ川と歌でたがやす百姓の顔が

時の風は笑顔を踏みつけて人を地平へと追い込んでいく

石は石を流水で磨き続けるとは限らない

石の形には涙の歴史が罅と成って食い付いている

ひかる鎌とサーベルと農民兵のゆがんだ顔が

石と石がぶつかると火花はその罅で死面をつくる

石の記憶が沈黙を押し通すとはかぎらない

石の裏側には何時の時代もしめつた意志の跡が留まっている

血膿と憤怒と狂気の幽閉された顔が

志は擦りへることで爆発力を濃縮していく

石は意志を留め続けるとは限らない

石は忿怒で心臓から眼の中へと移動する

小さく成りきつた石は瞳の底でその時を待っている



書道 黒石楨男

所感寸言

感想や批評を文章で表現する

簡単そうで難しい

しかし文章化されることで

新たな感想や批評が生まれる



洋画 安東公一

回り道の楽しさ

井口祥子

今は科学文明が進歩し、お金さえ出せば何でも手に入り、衣・食・住すべてインスタント時代で、あまり苦勞せずに食べ物が口に入ったり、衣類を身にまとったり、住むことができる。しかし、私はできる限り回り道をして自分の手で作る喜びを味わっている。

例えば、お風呂を沸かすのも灯油でスイッチ一つで沸かすのではなく、冬の仕事のひとつとして薪やたきもの作りに汗を出しながら、頑張っている。もちろん、私一人では到底できるものではない。夫がチェーンソーで木を切ってくれたり、斧で割ってくれるからこそできるのである。私は、

それを積み重ねたり、たきものを作る役である。薪の山ができると二人で、すばらしいことを成し遂げたように「これで、二年分位はあるね。」とか言って、喜びを分かち合っている。

毎日作る味噌汁一つでも、それに入れる味噌は大豆を畑で育てて作り、冬の寒の内の仕事のひとつとして味噌作りを欠かさない行事にしている。味噌汁の中に入れる具も野菜はほとんど手作りである。じゃがいも、玉葱、胡瓜をいっぱい作って、「そんなに、たくさん作っても、食べれりやあせんのに、あほらしいでしょう。」と人には笑われるが、じゃがいもを

ゆでて、すりつぶし、玉葱、ミンチ肉、人参等を入れて作るコロッケの味は又格別である。

その他、漬物、梅の赤漬け、らっきよ漬け等々楽しみはいっぱいある。着る物も、つぎ当てをして気に入った衣類は、布がすり切れそうになるまで着ている。夫の仕事着も何回も洗濯して着るものだから色あせてしまっている。

そんな風にしてエネルギーの節約、食べ物、衣類の節約をし、手作りを楽しんでみると、お金がどっさり貯まるかと思えば、その方はうといもので財布の底に穴が開いているのだろうか、いつもすっからかんで、いつもどうしようかと悩んでいる。

しかし、いつも回り道をして、自分で汗して作り出すことは、健康にもつながり、喜びも一入である。

心は氣持

清田 三智子

歌は世につれ、世は歌につれという事がある。リバイバルソングの流行のこの頃、私達人間の心も昔のなつかしい思い出がよみがえるとしたら、こんな幸せはないでしょう。

いつの世にも浮き沈みはあるが、それにうち勝って自分なりの体験、それが進歩につながる事と信じています。時に応じて、一喜一憂する事もあるがそれも人生の試練と考えています。幾多の経験をしてその心に養分をあたえることによって人情に変わる……。心の安らぎとはなにか、そんな事を考える。自分の心の狭さをつくづく感じるこの頃です。

いつの日か内職をしている時、ラ

ジオで聞いた言葉があります。心とはその都度、その都度で変っていくものと。

○苦しい時には大きな声で歌い、悲しい時には心の中で歌う。

○何事も頭と心である。頭は考える、心は氣持。

○人間が作ったものはこわれる。こわれないのは人間の心。

○ピンチの時それをばねにしてチャンスをつかむ。良い時は又ピンチが来ることを思い、心がまえを持つ。

心に栄養をたくわえることによって、人間の自立を確保することが出来るのだと思います。心は人間関係

でしか成長しないものと思っ
ています。心の成長を競いあ
える世の中にならいたいも
のです。なんでも書くこと
によって心のリハビリにな
り、ストレスも解消されま
す。心と体の状態が健康で
あれば、生活のリズムが整
うという事、又心を結ぶ対
話の大切さも知りました。

これからいつまで続くか分
からない人生の中で、一つ
でも多くの心の財産を増
やしていきたいらと思っ
ています。

よきことば

江見和巳

我が国は昔から言葉の幸う国と言われて来た。それは兎も角言葉の乱れは家庭内では暴力にも連なり子供は父母長上に対して段々不遜横柄な態度となりがちだ。そして目上の人

の言葉を素直に聞けぬ。なければ決して尊敬は受けられない。先般ノーベル賞を受けられた小柴、田中の両先生の態度をみても常に謙虚で奥床しい態度が国民全体に好感を以って迎えられる。また或る出生

の言葉を素直に聞けぬ。これらの事も総べて友達の感化が大きい。だから良き友を擇べといつても之は難しい。幼少の時から親が言葉の躰を大切に考えて行えば成長の段階でも必ずしも違和感はなく

て済もう。例えば友達がよくない言葉を使っても直ちに修正してやる様な事も必要ではないかと思う。兄の母が他界し子供が残った時など親と子が替わっていたらなど決して思ったり言っってはならない事も、私は知った。

の段階でも必ずしも違和感はなく済もう。例えば友達がよくない言葉を使っても直ちに修正してやる様な事も必要ではないかと思う。

人は勉強する力が勝れていても体力が他人をしのごうとも態度がよく



生花 塚田安代

落陽

原田順子

此処は二階病棟の一室である。南側に四枚と、西側に二枚の広い窓が設けられて、とても明るい部屋だ。窓から一望すると、眼前には広い広い水田があり、きれいに田植えがな

されている。その水田の向こうには、あまり高くない山並みが続き、緑深い山裾には集落が広がっている。

早朝窓から田の面を眺めていると、キラキラと細波が寄せたり返したりしている。右に左に斜めにと、風になびいてまるで大きなドミノを倒した時の様に、早苗がなぎ倒されて行く。いつ迄見ても飽きない。又夕方六時半頃になると、大きな真赤な夕陽が沈み始める。それが一つで

はない。低い山並みの上と、一面水の張られた早苗田の上をも真赤に染めて、大きくゆらぐ夕陽と二つ眺める事が出来る。そして見る見るうちに山間に沈んで行くが、沈んだ後は山の上の雲が一面真赤な夕焼け空となつて、美しく広がって行く。

絵心があれば絵にも描きたい、カメラがあればシャッターも切りたい、すばらしい風景である。天候がよければ当分此の景色が眺められるが、もう間もなく梅雨に入る。又雨の風情もひとしおだろう。緑の草木が雨に濡れて、一そう青々とした美しさを増す事だろう。早苗田も青田に変わって行くだろう。今まで生活して来て、

こんな身近な景色をゆっくり眺めた事もなかったが、本当に日本は美しい国だ。悲しい事も、苦しい事も、すっかり忘れさせてくれるひと時、四季折り折りの季節の移り変わり、自然のすばらしさを、付き添いをしながら、つれづれなるままに、じっくり味わっている。

さて今日もそろそろ入り日の時刻だ。落陽に向かって何を祈ろうか。

随筆 随想

おりにふれて

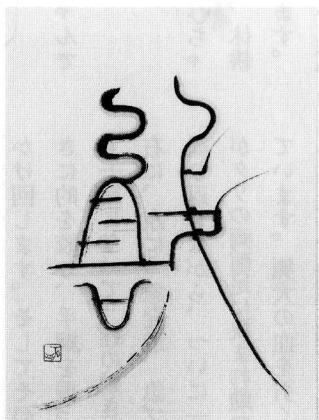
感じたことや

見聞・体験を

なにくれとなく

書き綴る

思いのままに



書道 北村福作

我家の家族犬二ひき点描

中田澄子

サブ、当年十二年の加齢を数える。人年齢では八十四歳？ 七年前我々

夫婦と一緒に神戸から、引越して来たのです。若さ、力、愛嬌も一ぱいのサブと、開拓精神満々の我々夫婦二人とで、この異文化溢れる当地での田舎暮らしを初めたのです。そして年月を重ね、共に老いも進行してきました。サブは一年程前心臓手術をしてからは、めっきりその感が強くなり、「ご飯より好きだった散歩」にもあまり興味を示さなくなり、もっぱら「老の大食らい！」と惰眠を楽しんでいるようです。五年前前の十月、生後二か月の小犬が仲間入りしました。栗の実が豊作の年です。

た。ビーグルの雑種、クリちゃんです。

クリ、蛙ハントの巻
初夏の頃、朝露で足をびちゃびちゃに濡らしながら散歩をします。休耕田はフサフサに草が生えています。お百姓さんにとっては、さぞかし気掛りな状態なのでしょうが、犬と私はそんな事、おかまいなく、楽しく自然を満喫してしまいます。そのくさむらの中を何びきもの蛙が縦横に飛び交っています。がさごそと、へびいちごの真紅な実をプルッと振るわせながら、又一面のクローバーの白い花をかすりながら高く又、低く、小さな小さなものも大きなものも元

氣一ぱい。朝の野原が息づいています。猟犬の血を引くクリはもう我慢が出来ません。手当りしだいに追いかけて回ります。そしてその内の一匹きに絞りを絞って、手綱を握っている私も一緒になって、蛙の動きに合わせて、右に、左に、急発進、急ブレーキを繰り返しながら、ついに一匹の蛙がクリの両前足に挟まれ動かなくなっています。猟犬の血を引くクリはそろりと自分の鼻を蛙に近づけ様子を見てみます。こんどは、蛙を挟んだ両前足を少し離して蛙の反応を試してみます。身じろぎだにしない蛙を試してみます。クリの前片足がそっと、触って揺らしてみます。蛙は何の反応も示しません。徐に、クリはしゃがみ込んだまま自分の顔をフツと横に向け、油断のポーズを取ります。クリの視線は獲物から決して離れていません。

白目を向いて、しっかりと見張っています。顔は横を向き、油断のポーズを取り、視線は自分の前両足に挟まれた獲物の、蛙の、今がチャンスと逃げ出さんとする時を、じっと待っているのです。運動したのと興奮とで、大きく、激しく波打っていた叢にへばりつき、べったり濡れたクリの胸や腹の動きも収まり、勝利を確

信したクリは、すっくと立ち上がり、今しがた自分の持てるあらゆる狩猟の知識を発揮して射止めた獲物からいとも簡単に熱意を無くしてしまい、その場から凱旋するのです。帰り道、草深い休耕田にオレンジ色の小さな蝶がちらちら飛ぶのを少し追っ掛けでは見たものの気乗りしない様子でサッと飛び散られてしまい、まだ足元でピョンピョン動めく蛙なんぞも少しは追っかけてはみるものの、鼻

歌交じりの動作では、皆逃げられてしまいます。エノコロ草の根元にオシッコをひっ掛けたクリは、田畑を通り抜けてコンクリート舗装した町道に自分の足跡を付けながら家路に向かうのです。大きな犬の両前足で挟まれた小さな蛙が、自分の真上にある犬の表情など知る由もないとい

老いのたわごと

吉政実夫

寝て居ても夢は土居の今むかし

むかしむかしそのむかし、出雲の神々は浪の彼方の大陸より入った交物を大和の国司に献上すべく、出雲街道土居の里を通過して行かれた事でしょう。その荷物の中には、御鏡も有ったでしょう。また、劔も有り、石器時代の終りをつける金属加工の技術

の品も有り稲作の種籾もあったことでしょう。

又大和の国の答礼使も通ったことでしょう。次第に開け行く土居の里にも人が住むようになり、旅人の食糧や馬の飼料の補給基地となり、中世には中央政府とつながりが出来、菅家の都おちも有り、平の清盛の直

筆とからす丸の名刀（清盛の愛用の刀）が現在出雲大社の宝物館に展示されて居り、又日本一の宝八咫の鏡の出土も土居の里でした。現在山口県の赤間神宮の祭神となって居りあの有名な大閼さんも足趾を残しております。

だれか大学者が現われてこれら特

筆すべき歴史とロマンに富んだ土居の里を天下に紹介してくれる人は居ないかなあと思う毎日です。日毎にせまる老いの無常の風の前に、浅学非才の身もかえりみず馬鹿爺さんのたわごとと御笑い下さい。

山も川も昔とかはらねど
まりははつたる我が姿かな

五十年ぶりの同窓会

光井和彦

今年の初日の出祭りの時、美作町田殿の教え子に出会った。「今年還暦を迎えるので、同窓会をしますから来てください。」とのこと。「喜んで行かせてもらいます。」と言って別れた。

昭和二十七年、粟広小学校へ転動して最初に受け持った四年生の教え子である。教え子に出会ったことに

より、その頃のことを思い出されてくる。町村合併の動きが盛んになり、粟井が江見につくか、勝田につくかで意見がわかれたが、江見に決まった。それで、粟広の全村合併がくずれて分村合併になり、粟広小学校が廃校になったのだった。

いつだろうかと心待ちにしていた

ら、三月十五日に案内が届いた。

「平成十五年五月四日（日）午前十一時からホテル「作州武蔵」でします。当日は小学校の跡地見学、いこの奉献など計画しています。」とあり、名簿も添えられていた。当時の写真を取り出してきて名簿と比べてどんなに変わっているだろうかと思像してみた。

いよいよ当日が来た。子供に送ってもらって会場に着いた。受付で同窓会の要項と名札を受け取る。五十年ぶりで名前の思い出せない顔もあるが、名札であら誰さんとわかり、話をしていると昔の俤が甦ってくる。会場で三三五五集まって久しぶりの話に花を咲かせている。

会が始まって、発起人の挨拶があった。「今年還暦。この区切りの年に、仲間と思ひ出や近況や夢を語り合い、こ

れからの人生を有意義なものにしたい

ものです。・・・」しばらくたって近況報告があった。四十五名中、男性十五名女性十名の出席。東京・愛知・大分など遠方からの出席者もある。職業もいろいろ、家庭の様子もさまざま、それぞれのいろんな生きかたを感じさせられた。

ひとしきり歓談してから、会場をあとに、粟広小学校の跡地までゴルフ場内を通って行った。案外近かった。跡地はゴルフ場に変わり、「粟広小学校の跡」と刻んだ碑と池があるだけであった。昔描いた学校の絵を見ながら、跡地に立って昔をしのんだ。その後、子供にかえて、元氣よくいのこの歌を歌って、いのこをついた。

やがてお開きになり、今日一日の楽しかった思い出を胸に帰途についた。

言葉にすれば

原 洋 一

五年前、私がこの町に来た時、生

活の一部としていつかこの町の文化に触れてみたいと思っていた。調べしてみると、短歌の会や俳句の会はたくさんあり、たくさんの方が楽しんでいようであった。でも、私には経験のないことだったので参加することに躊躇していた。そんな時、町の広報誌に「作東町川柳同好会員の募集」が載っていた。川柳とて私にとっては初めての経験だったが、会が新規発会ということは、もしかして同じスタートラインから勉強できるのではないかと思って、さっそく応募した。それが、私が川柳を始めるきっかけであった。

それまでの私はというと、

「七人の敵あり弱き見せられぬ」
まさに男の戦場を歩いていた。私にとっては結構きつい競争社会であった。不器用な私でも、いつの間にか世渡りの術を身に付けていた。

「世渡りに笑う仮面を持ち歩く」
そんな生活に疲れ、自分の力の限界を感じ始めた頃でもあった。人には語れない悩みだっ・・・。

「この背や時々泣きます笑います」
サラリーマン生活を捨てよう！
そう決心して、密かに温めていた夢を、少しづつではあったが描き始めた。

「捨て切れぬ夢を刻んだ古時計」
これまでの生き様に拘っている

なかなか夢の実現は難しそうであった。過去を捨てる決断には勇気があったが、自然の中での生活の魅力が背中を押してくれた。

「くだわりを捨てろと笑う白い雲」吹っ切れてしまえば、なんと視野の狭かったこと。男のプライド？それすら捨ててみようかな、などと・・・

「退職後妻のリズムで生きていく」このリズム、乗ってみると、結構心地よい。そして、

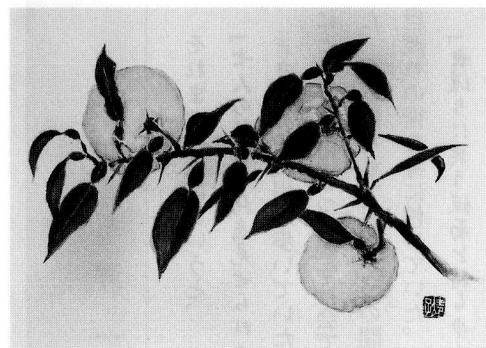
「坐き方を覚えて遠くが少し見え」私が変われば妻も変わるということも知った。

「脱皮して私も蝶に変わりたい」などと抜かすようになってしまったのは行き過ぎかもしれないが。そしてこの町で土に親しんで五年が過ぎた。本当の私の人生これから

が勝負だななどと妙に納得している。老後という言葉は好きではない。余生もまたあまり良い言葉とは思わないが、

「じつくりと煮込む余生の味加減」どんな味になるのか、自分でも楽しみである。自分らしい味が出せれば良いのだが。そして、川柳もこれからの友達として連れて行こうと思っている。下手は下手なりに楽しいものである。

「身の丈と映す鏡のやに位む」いまや人生八十年とか。残された時間がどれほどだろうか。私にも分からない。これからは川柳で自分の生き様を言葉にすれば、意外と新しい私を発見できるかもしれないなどと勝手なことを思う近頃である。



日本画 荒井栄子

父と城の石垣

田中清一

「お父ちゃん!!津山の桜見つれて行ってえ」と言うと言と行くことになった。いつもの草履を脱ぎすてて、母ちゃんの出してくれたピカピカの運動靴をはいて、しかし靴下まではなかった。たばこの臭いのする父ちゃんの背中につかまって「足を延ばすんでスポークが危なえから:」と自転車に乗せてもらった。

五名ののりばで待っていてもなかなか播美バスは定時には来ない。木炭車だから。お父の本音は、酒を飲むこと、石とりの発破(火薬)を取りに行くこと、そして自分も城を見たかったのだろう

「この城石垣はびくともせんじゃ

ろう」とさも得意そうに父は僕に話しかけた。

「良くできとるじゃろう、この反りも天場も」片目で石垣の角からねらいながら、ことばを続けた。

「石垣は表だけじゃないんで。腹を組んで抱き合うてななめにもたれおうて角で手を継いどるんじゃ。足を強うするため根ぼりと捨て石がだいいじなんじゃ」

しばらく無言で行って石を叩きながら、

「目に見えんけど、広う掘った控え堀は表の石の数倍もの裏石が表の石を支えとるんじゃあ、いつまでも:」

言葉少なな父ちゃんだけど最後にこう言った。

「男はどなえな事があるうと耐えられる石垣じゃあ」

「女はそれを美しゅうやさしゅう抱え込むような桜じゃあ」

ぼくはそれから、綺麗に飾った天守閣よりそれを支えて、いまでも動かない石垣が好きになった。父ちゃんのようにえらくなくても……

さて、津山城はここで築城四百年を迎える。

あの有名な、本能寺で信長と共に戦死した蘭丸の弟森忠政の入封により慶長九年春から元和二年三月の十二年間をかけて築城された。二代森長継により今で言う衆楽園が造られ文字通り美作の國を治めた。

森家はあわれ四代にして衰退し、松平家が明治維新に至るまで長きに

巨り、今の津山の産業・文化はもとより津山人の資質までつくりあげたと言われる。

記念事業としていま備中櫓が再建されつつあるが、私は建物よりは城のゆるぎない石垣に心を寄せる者の一人である。

津山城（築城四百年賦）

田中清一

幾代ゆるがぬ鶴山や
桜はまさに華の衣
城郭うるおす美酒に
天下を酔うて舞う鶴の
一声高し津山城

盛衰秘むる石垣や
懐いを照らす森の月
城苑めぐる笛の音に

天下の掟を哭く鶴の
一吟哀し津山城

海山結ぶ川船や
心織りなす出雲往来
城威に映ゆる松の上に
天下を遍く翔ぶ鶴の
一眺豊けし津山城

神奈備目守る美作や
流れも清き吉井川
城楼夢をふたたびに
天下を千代と請う鶴の
一志徹せし津山城

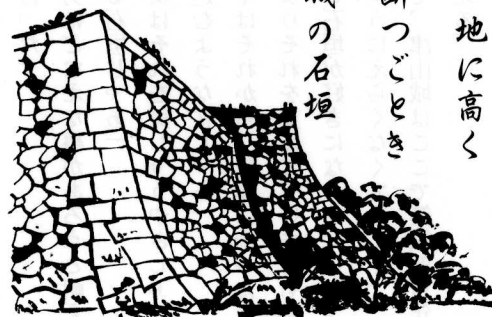
もののふの

魂とも築きて

地に高く

雲断つごととき

城の石垣



小さな旅の思い出

岩本敏子

朝は少し霧が濃く、今日はドライブは無理かなと、話しながら、日曜日の遅い朝食を済ませてテレビの天気予報を見て居た主人が、あのな「エーデ。」と言い、見るとお日様マークが並んでいる。早速お弁当、お茶、おやつ、それに主人の薬、着替を持って午前十時前に出発。

昨夜見ておいた道路地図を頼りに、今日は加茂から西北に走ることにした。作東鯉 勝田宗掛 大町を通り、作州街道（大規模農道）を走り、津山市榎へ国道五十三号線を少し南へ下り加茂線へ入る……。加茂駅を過ぎて、主人が学生の頃よく実習に行っていた、黒木ダムへ行く予定が、主人の

気が変わり越畑ふるさと村へ行く事にした。杉木立の林道をぬけて日当りの良い場所で小休止。主人に十時の薬とお茶、牛乳を摂ってもらい出発。途中に休憩所があり数台の車が停って居て、子供達にぎやかに遊んでいた。更に車を山上へと進めると、あたりの木々が美しく紅葉していて、その美しさに主人は満足げに「エーナー。」と喜んでいた。

峠を越して、越畑ふるさと村へ寄り、資料館に入って古い民具や農具を見、「ホージャーホージャ」と感心して居た。どうだんつつじが真紅に紅葉して居た。その前で、車椅子に乗せ写真を撮る。うれしそうにこ

こり笑ってVサインを見せてくれる。越畑から奥津への道は完全に舗装されており、辺りの山も緑の杉、松に檜、くぬぎの黄色、黄櫨、その他低木の赤がとても美しく澄みきった秋の空の青とのコントラストがすばらしい。

奥津から少し上って恩原高原へ行く。ここは長男が高校三年の春スキーで転倒し右足骨折し、夜二人でスキー場まで迎えに行き、暗い雪の高原で「ロッジ」をさがすのに大変だった話をしながら車を走らす。さわやかな高原では大勢の観光客がカメラのシャッターを押していた。湖畔の車寄せで美しい白樺林、落葉松の黄色な林を見ながら昼食をとり、少し散歩する。僅かな風にはらはらと散る櫨の葉がまるで小鳥が舞っている様。車椅子の上からそっと手をのばして

いるのが子供の様でいとおしく思う。

恩原高原を午後一時半に出発し、途中奥津溪谷でもみじを見る予定であったが、大勢の人で車の駐車ができず、そのまま一七九号線を下り、苦田ダムの工事を見乍ら鏡野道の駅夢広場迄帰り休憩。買物をして二時半に出発。少し時間が早いので主人の希望で横野の滝を見に行く。昨年の台風十号で道路が荒れ、一の滝まで帰ることにした。上横野部落は暮らしむきが良いのか、どの家も大きな構え。新築中の家も三戸あり、子供達が広場でにぎやかに遊んでいる姿も見え、何となくうれしい気分です。帰りは勝央町へまわり、ファーマーズの前を通るとここも大勢の人でにぎわっていた。主人の体調も良く午後四時少し前帰着。今日の走行百七十キロ。楽しい思い出を

つくる事が出来た一日だった。

(平成十一年十一月十四日記)

折り紙の奥の深き

保利 龍男

「牛にひかれて善光寺まいり。」の

ことわざが当てはまるかどうか。孫にせがまれ折り紙で遊んでいるうちにいっしょに興味湧いて、折り紙を折ることがとても楽しくて、面白さを感じるようになってからは暇があるたびに、自分から孫の折り紙を持つち出しては、(親子であそぶおりがみ事典)と、いったような教本をもとに、少しの間でも折り紙に触れていた気持ちになって、かれこれ三年近くになり、今は折り紙でなにか一つの物を作っている時が一番楽しく時の過ぎるのも忘れるほど、一日一日張り合いのある暮らしをして

います。

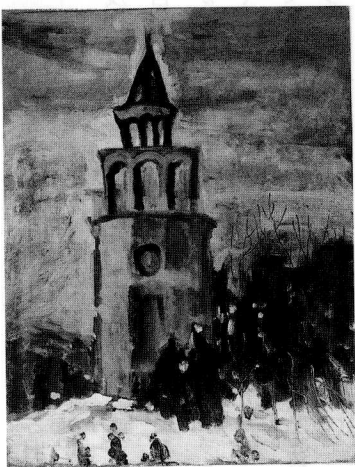
さて折り紙は日本で始まった文化として、今では世界中に通じていますが、日本には折り紙の代名詞でもあります伝統の美しい折り鶴の作品は、お母さんたちのほとんどの方が折れるのですが、折り紙全体の中ではスイスイと簡単に折り上げてしまうことの出来るものと、それとは反対に難しく一日ではとても折り上げることの困難なものまで、折り紙は折れば折るほど、奥の深さに感動させられてしまいます。一枚の紙があっという間に変化する瞬間、イメージする作品を完成させるための

工夫こそが、いわゆる熱中する面白さではないでしょうか。

折り紙を暮らしの中に取り入れて、創作する楽しさ、仲間と作り合う楽しさはいまでもなく、日常生活のなかで役立つものや、或いは空とぶ鳥のおりがみ、花のおりがみ、虫のおりがみ、動物のおりがみなど、折り紙特有の魅力はもとより、折り紙の長所は、数えればきりがありません。

私は今日になって漸くその難しいものが魅力的になり、工芸的な美しさをもついろいろな種類の作品に本気で挑戦していくつもりです。出来上がった物は約百種類余りのこしています。これから折り続けていく上で大切な反省材料として生かしていくつもりです。昔から指を使う動作は、脳の活性化と老化防止にもな

ると色々な書物にも記載されているとおりですが、気持ちのせいであるときなどには安らぎどころか逆にストレスの原因ともなりかねませんから、そういうときには触れないことです。



洋画 佐々木 巨

ホトトギス

井上健一

五月下旬から『テッペンカケタカ』とか、『トッチャンコケタカ』とか、人の悪口に聞こえる鳥の声を聞く。ホトトギスである。

この鳥は昔から短歌や俳句、ことわざ等によく登場する。

この鳥の名が使われている句やことわざには、時代によって二通りの意味がある。

昔には、季節の変わり目を伝える風流な鳥として描かれている。

しかし、この鳥の特殊の習性を知った時から一転して裏切りを示す暗号に、使用されている。

その習性とは、自分では巣を作らず、他の鳥の巣に卵を産み落し、元

の卵より先にふかして、残りの卵を巣の外に捨ててしまい、自分だけ他の鳥に育ててもらおう。やがてホトトギスとして、巣立っていく。

更にこの鳥は、真夜中でもやかましく鳴いている。どうやら昼夜目が見えるようだ。実に不思議な鳥だ。

この鳥の習性を知って疑問を感じた言い伝えがある。信長、秀吉、家康の性格を現わしたと言う、『鳴かぬなら……ホトトギス』である。なぜホトトギスなのだろう？ まったくわからない。もしかすると、戦国時代に活躍した武将を、もじっているのかもしれない。

次に、有名な句を、もじってみた。

《目に青葉 山ホトトギス 初カット》

この句は、青葉の繁る旧暦の五月にカツオの取れる地域の武将に裏切られた。なんとか仇を討ってもらいたい。という暗号にも読み取れる。

私にかかればロマンチックも何もなくなる。

とりあえず、この辺りで終了する。

福山小学校思い出の記

春名貞女

私達は大正八年と九年の生れで、昭和六年三月尋常小学校を卒業した。八十三才の老齢となり年と共に同級生も一人死亡二人病氣と、なかなか会えぬまま月日は流れて行く。作東町に住む人にはたまに会う事が出来るが遠くへ住む人には会えない。思い切って同窓会の話が出る。旧小学校のあとが山の学校として会合宿泊が出来ると聞きお願いしてみる。快く承諾して頂き四月二十三日ときま

訓を頂きなつかしき一しおでした。また校庭の西に立つ桜の木も随分大きくなり、立派な花を咲かせている様です。子供の頃一かかえ程あった様に思う。幹も周り一米八十程にもなっている。事務局には皆集まっている。職員の皆様は温く迎えて頂き最初に記念撮影をして下さった。学級三十五名いたが今は生存者十

本は「ハナ」「ハト」「マメ」「マス」でした。六年生の時初めて、セーラー服を買って来て呉れました。平成十一年三月小学校廃校となり、福山小学史が地域の方々の努力により企画編集され、私達も先ず三十六頁を開いて、此の校舎だとなつかしく見入りました。(朝礼の風景)とこの頃があります。新校舎と旧校舎と光る様に写っております。これが大鏡です。当時の校長先生は心の教育をされました。鏡に向けて、自分は今日は悪い心を持っているか、よい心を持っているか「常に反省せよ」と教育の方針でした。毎朝朝礼の時に鏡の御製を校長先生が音頭をとられ、皆がこれに唱和していました。その御製を申し上げますと、●うち向う度に心を磨けとや鏡は神の作り

そめけん ●我を又さらに磨かん曇りなき、人の心を鏡にはして ●鏡には姿ばかりがうつるぞと思う心はずかしきかな、これを三唱して

●金剛石も磨かずは玉の光りはそわざらん。

●芝刈りなわなわらじ作りの二宮金次郎の唄を合唱して朝礼が終りました。此の大鏡は国貞出身の当時の神原正夫大尉が寄贈されたものです。学校の行事としては三大行事があります。運動会は校庭のせまいのが難点でした。校庭の西側に忠魂碑あり、此の後を通過して、どうにか百米のコースが取れた。教室の窓からも見物していました。練習の時は観音寺へ行き練習した事もあります。当時は学校からチョロチョロと降りてお寺の裏山道をかけ登り近かった様に思います。また十二月十二日は開

かれは村の女性達が「東京音頭」か「さくらおどり」かと思えます。

次に当時の先生方は県北や県南から赴任された人がありますが、旧福山村役場のとなりに教員住宅が一室ありました。その他の人は大てい下宿生活でした。しかし、電灯がついていないのが難点でした。(電灯は昭和二十二年につく)くらいランプの下での残務など大変だったと思います。私の実家の亡母の話によれば、明治二十九年開校当時から、先生の下宿のお世話をしていたと聞きました。私も大正末期から昭和にかけて先生の下宿生活を覚えていきます。ランプにたえられないお方は角南、土居の電灯のあるところへ変って行かれた人もあります。

私の兄大正五年生れ、弟は大正十二年生れで、勝間田農林学校へ四里

校記念日です。品評会でした。学校から大根、白菜、聖護院大根の種子を頂き、これを家で育て当日持ち寄る事でした。これに合わせて、書画、裁縫、手芸品等を展示して等級がそれぞれについていました。

三月の学芸会も楽しい思い出となります。何しろ学校の行事としては最大のものでした。と申しますのも、すでに児童数は多くなり教室は一ぱい、青年学校教室も理科教室とかね、裁縫教室と民家をかりての教室でした。従って講堂も二教室に分けて学んでおりました。校内二教室を一つにまとめ机を寄せて高い段を作りその上に畳を敷いて舞台を作るのにも一苦労でした。娯楽のない時代だから村中こぞって重箱におべんとうをつめて朝早くから晩おそくまでつめて下さいました。しかし音楽の道

の道を自転車を通いましたが、しかし私は人里はなれた、豊田村を通り難所の大谷坂を越えての女子一人「連れもないのによやらん。」と無理解な父母で林野女学校へ行かせてくれませんでした。仕方なく高等小学校へ。でもせいたくは言えません。友は小学校六年でやめる人らは江見の片倉製糸へ行く人もあり三十五名の友は、十七名高等科へ進んだのですから。これより一、二年複式学級でした。これより村に残るものは青年学校生義務制となり、本科三年と研究科一年と、計此の福山小学校へは十二年通った事になります。それ以来当地に十九才で嫁入りし、就職の経験ありません。色々と話はつきませんが、家庭の許す者のみ山の学校に二泊致しました。大きな立派なお風呂へ入れて頂き、新しい寝具

具がないのが淋しく、オルガン大小あるのみ。そこで蓄音機を買ってはという事になり、先だつものは金なり、お金をもうける為に学校より約四キロ。柳と言う所へ女竹を刈りに行きました。小学校高等科と公民学校(後の青年旧学校)の生徒を連れて竹切りに行き初めて柳の土地を知りました。みんなで力を合わせ女竹のよいのが沢山あり切り取り車力についで帰りました。これを、先生方が放課後に少しずつ竹もみ(筆の長さ)にそろえること)し、三十糎位の輪にして自転車につけ土居駅前の筆じく屋さんに買ってもらい金にかえて蓄音機を買う事が出来ました。「童よう」や流行の「新おどり」等、色々買って頂き今でもうれしかった事が記憶に残って居ります。之が小学校誌四十一頁下部に出ています。

で休ませて頂きました。雨がずっと降って居りましたので、なつかしの観音様へはお参り出来ず残念でした。二十五日朝、又来年も元気で生きて居りましたら、山の学校で会いましょう。と別れを惜しんで散会しました。それぞれの家路へと、楽しい思い出のミニ同窓会でした。



日本画 横山孝子

江戸俳諧三巨峰

黒藪 貴

私は若い時に大津市石山で会社勤めをして居りましたが、其の頃、京都の鈴鹿野風呂先生が俳誌京鹿子を主宰して居られました、その高弟の西沢十七星さんが寄宿舎の舎監で寮内で有志を集め句会を催して居られ私も参加して指導を受けていました。

其の後帰郷しましたが、貧乏忙しいので遠のいて居りましたが十数年前から句作をはじめて居ります。いつも思うのですがいるは四十八文字の組合せで五七五の十七字の句が何千万と作られてよく同じにならないものだと感心します。

江戸時代の俳諧には次に記した他

に其角去来嵐雪許六千代尼等有名人の句が今も残っています。

俳句は、いかに上手な方にせよ一句のこらず名句ができたならそれは神業です。只風流めかさねばならぬと思ひ、風流げな文句を集めて並べると、之は嫌味たっぶりな句にしかありません。又寺屋根に紅葉、焚火と風、霜やけの手に密相、炬燵に猫など有りふれた題材は忌むべきです。又広報さくとうの前の選者の岩本先生も今の山本先生もよく指摘されませんが、花が美しい、夏で暑いとか言うてしまつては余韻のない句になつてしまいますし、一句の中に季語を二つも三つも入れないことです。之

は季重ねと言われます。季語は一万余ありますが歳時記で研究することです。

色色と決まりがありますがそれを弁まえて励むことです。

次の三巨峰の句は一般に尤も知られてるように思ひますので玩味して下さい。

松尾芭蕉

花の雲鐘は上野か浅草か
閑かさや岩にしみ入る蟬の声
秋深き隣は何をする人ぞ
初しぐれ猿も小衰をほしげなり
おもしろうてやがてかなしき鶉舟かな
するが地や花たちばなも茶の匂ひ
奈良七重七堂伽藍八重ざくら
名月や池をめぐりて夜もすがら
荒海や佐渡によこたふ天の河

旅に病て夢は枯野をかけめぐる

与謝蕪村

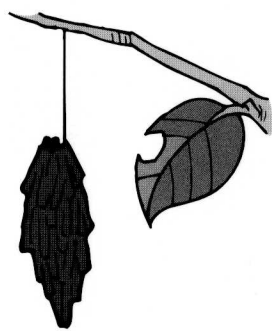
菜の花や月は東に日は西に
さみだれや大河を前に家二軒
月天心貧しき町を通りけり
葱買うて枯木の中を帰りけり
鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな
鮎おちて焚火ゆかしき宇治の里
更衣金ぶく輪の鞆置ん
ほととぎす平安城を筋違に
三井寺や日は午にせまる若楓
春の海終日のたりのたりかな

我と来てあそべや親のない雀

ともかくもあなたまかせの年の暮
竹売りの竹にもしばし雀かな
大根引大根で道教へけり
焚くほどは風がくれたる落葉かな

小林一茶

是がまあ終の柄か雪五尺
雀の子そこのけそこのけお馬が通る
瘦蛙まけるな一茶是に有り
名月をとってくれろと泣く子かな
目出度さもちゆう位なりおらが春



歴史紀行

大きなできごと

些細な歩み

みな

人間の歴史

かたりべとなって

伝えよう

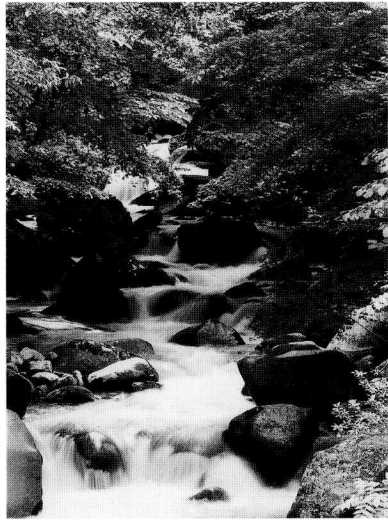


写真 末宗秀夫

御鏡騒動記

吉政実夫

八咫の鏡を発掘された春名義雄さんは蓮華寺村の生まれで、少年時代から勉強家で国鉄に入り因美線の加茂駅長を最後に昭和三十年頃に退職され、土居の町に住み郷土史の研究に没頭されて居られた。加茂の妹尾家の古文書により万の峠の天皇谷の八咫の鏡が隠し祭られていることを知られ、昭和三十三年七月十三日友人三人とともに発掘されました。

この鏡の処置について同年九月頃に土居で祭ってほしいとの相談があり、宮司沖田年雄先生、区長岩崎茂氏に相談したところ区員、宮総代、有志多数、役場の二階に集まり土居で祭ろうということに満場一致で決

まりました。事務所は岩崎区長宅に看板をあげ、名称は美作皇大神宮と決まり、その後上田町長も出席されて町民大会も開かれ、着々と準備が整って行きました。ところが、どうした心変わりか春名さんは鏡を山口市の赤間神宮に奉納すべく新聞社や役所回りをしているとの情報が入り、土居の連中はびっくり仰天、岩崎区長外有志七名、上田町長にも協力して頂き岡山へ急行いたしました(当時春名さんは岡山の親戚におられました)。ところが少しの手違いで本人を捕まえることが出来ず騒動は山口の方へと移っていきます。神宮のほうでは奉還式をすべく準備

をしていたところでしたが、取り延べとなり談判すること十時間、その結果お鏡は赤間神宮に仮安置となり岡山と山口両県知事の調停に任ずるということに決まり誓約書が取り交わされひとまず散会となりました。その後鏡の所有権をめぐる裁判となり土居地区としても弁護士を立てて裁判に加わり私も数回津山の裁判所に傍聴に行きましたが、弁護士的事務的なやり取りと裁判長の次回とすると言う程度の進展で打ちあがらず、その後十四年に及ぶ長期裁判で有志の方も次々と亡くなられ費用の面でも耐えられず裁判を放棄せざるを得ぬこととなりました。これ程の宝物を掘り出しながら考えれば考えるほど残念無念、やるかたなしの土居地区民の嘆きは今も消えることは有りません。この度、有志により

史跡保存会が出来、私も世話役の一人に加えさせてもらい当時の事をしる者として思い出を書いてみました。

八咫の鏡は日本国の象徴であり皇大神宮に祭られており、歴代天皇の御物として三種の神器の一つです。

御鏡は千年以上皇位継承の宝物として皇居に神殿を造りお祭りしてあります。史書によれば皇居が二回火災がありお鏡も焼損して居ります。この度御鏡は壇ノ浦で崩御された安徳天皇の御物の中から、妹尾氏によって運ばれたとの説と、南朝の植月御所から土居の妹尾氏によって運ばれたとの説があります。私の聴いていることで今は亡き妹尾居郷さんのお父さんに与喜治さんという人があり、妹尾さん方には永年、家宝じゃと言いつづけてきた古く黒くすすけた木箱が有ったそうで何か書いてないか調

べて居たところ県警の鑑識課の紹介を得て調べたところ、安徳天皇御衣と書いてあり与喜治さんはこんな大切な物を家に置いていてはならんと老体なので家族の付き添いで赤間神宮にお参りし奉納されたそうです。この話は春名さんからも聴いておりこれが真実とすれば壇の浦の話も信憑性を帯びてまいります。

最後に発掘場所について書き加えさせていただきます。お鏡の発掘の聖地天皇谷は国道一七九号線の万の峠の頂上より三百メートル南にあり現在の国道は大正時代初期に開通して開けた所で当時は夜は追いはぎがでるし、大蛇も出没するし、狐の踊り場と言う伝説もあり、現在のよう自動車も通らず寂しい所でした。現在は住宅団地が出来て沢山の方が住んでおり将来はまだまだ栄える事

宮本武蔵と津山のお城

衣笠 隼 巳

おそらく宮本武蔵と津山城に接点があるろう筈はないがこんなタイトルにする目につき易いと思ひこれにした。

今迄に色々な大河ドラマが放映されて来たが主人公の出身地や活躍した地域が一時的ではあるがブームに沸く。

ご多分にもれず今年には武蔵ブームに沸いている。又それに便乗して地名度も上り、経済的効果もあれば大変結構なことだ。

宮本武蔵について私は特別な興味を持って居るわけではないが、映画が全盛期の頃モノクロで一乗寺下り松決闘の場面など手に汗握り、固唾を飲んで見たのを覚えている。今、連続ドラマで武蔵が放映され

ているが初回から数回は見たが今は全く見ていない。それは現代の役者がそれなりの衣装をまとい脚本にしたがって、現代風に立ち振舞っているだけの様な感じがするからです。

そんなある日平成十五年六月十日の新聞にこんな記事が載っていた。一部を紹介すると——兵法の道を求めて諸国放浪の一生を送った武蔵、その戦いの果てに六十余歳の生涯を終えた剣豪の実像と足跡はいかにもナゾが多い。名だたる剣豪といつても、一介の浪人であった武蔵のすべてが不明というのが実際のところ。それゆえに小説にもなる。出生の地さえ三説あって確定せず剣の武者修

と思います。明治以前の天皇谷は人々は恐れおののいて立ち入り近づかなかった所の様です、大蛇は平成五年頃に死んでおり実在のものであったようです。年代不明ですが、出合池の頭に蛇塚が築かれ大蛇退散の加持祈禱が行われた跡地もあります。何れにしてもこのロマンに満ちた史跡の真実は今後皆さんの研究に御任せすることとしたいと思います。

この度の史跡保存事業につきましては地区内の大勢の方々の御協力を得て作東の史跡や日本の史跡として残すことができるのは私ひとりの喜びでなく作東町民の誇りであり宝であると思ひます。この度の事業趣旨に賛同下さいました方々に心からお礼申し上げます。

行もその多くが伝説的で——中略——

武蔵と小次郎がやいばをまじえた背景に小倉細川藩と隣接の筑前黒田藩の確執があったとみられる。そんな中で小倉築城にからみ津山藩が家臣を派遣したことが縁で細川家から森家の津山城完成を祝って贈られたのが津山城の宝として天守閣にあった朝顔式の洋鐘である——と。

この記事を読んで、私はそれほど関心もわかないし、又内容については是非を問うつもりもないが最後に書かれていた「天守閣にあった朝顔式の洋鐘」が目にとまった。

私の祖父は明治の初めに生まれ亡くなつて五十年余りになる。

その祖父が生前よく聞かせてくれた昔の話の中津山城の話があった。それは明治四年廢藩置縣の布告によって、賛否両論がある中、津山城も取

り壊す羽目になったこと。理由は巨大すぎて後々の管理が出来ないというのが本当らしい。そこで無くなる前に見ておきたいと多くの見物人がお城へ押し寄せたという。

それに今迄一般庶民が見ることの出来なかつた城の内部まで見られるとあって噂が噂を呼びお城見物がなされたという。

そんな折、祖父はまだ三歳、親に背負われて今の柿ヶ原より近所の人達と連れだつて行った。行くといつても歩く以外に交通手段はなく野宿をしながらやつの思いで津山へ着いた。そんなお城見物の中で驚く出来事があった。それは天守閣の最上部へ上った時のこと。朝顔の形をした鐘が吊してあった。その鐘を一緒に行った連中の一人が面白半分に煙管(キセル)の雁首で叩いたところ

大きな音で鳴り響いた。もともとその鐘は落城などよほどの事態以外鳴らすことが固く禁じられていた為、居合わせた人達は肝をつぶし、とんで来た警固の役人にこっぴどく叱られた。という話だった。

色々な催が計画されているそうですが、今回の新聞を読んで武蔵が晩年を過ごしたとされる細川藩から贈られた鐘と祖父の話に出てくる鐘が同じものと思われたので思いつくままを書いてみました。

「江見廃寺」と「高本遺跡」の再検討 アイタケンカ 英多郡家は英多郷の何村にあった？

加藤 芳英

当町の文化協会「歴史教室」の九名は、今年三月、地元藤生の中山道夫、道信千昭さんの案内説明に導かれつつ両遺跡を踏査しました。「江見廃寺」は藤生ゲートボール場のある狭い宅地です。その場所以外の水田は、吉野川が氾濫すると、昭和

時代でも水没災害を受けました。藤生の水田の字名を、全部調べました。「河原田」「溝測」「測ヶ」「石ノ町」「袋尻」等、氾濫原の歴史を知る字名がありました。
約二百年前の『東作誌』は、「古の寺跡にて藤原の塔と云伝ふ」との

み記すだけで二百年前の奈良時代の実像は空白といえます。

「大海廢寺」は発掘調査され、伽藍配置もある程度わかっています。大海寺の「心礎」に穴が掘られているから、三重塔とか多宝塔の土台石と想定できます。「江見廢寺」の「礎石」には舍利孔も無く少し突起があるだけです。棟持ち支柱の土台石だと考えることが可能です。町内の人にも此処に『タタラ高殿』もしくは「瓦窯高殿」が建つておったのではないかという気分の人も居られると思います。

「高本遺跡」の関係に入ります。前・役場住民課長の新田祐之氏(山城)は、高本遺跡のエリアの地名は『再命ヶ市』であることを教えて下さったので、勇気づけられました。

川崎の「報恩寺」先代住職(故)

川端貞心氏は、「高本遺跡には七つの僧堂があったという寺伝があり、その中の一つが川崎に移って報恩寺になった」次第を、道信千昭さんに生前に話されていました。

岡映氏は自伝『荊冠記』の中で「昔(奈良時代)、堂屋敷と呼ばれるこの台地に寺か墓地があった……」と注目すべき「部落伝承」を綴っておられます。

右の二つの伝承は、高本遺跡内に堂宇が建ち並んでいた事を示しています。

約三十年前、第一次発掘が行われました。(中国道用地内)その結果、二間×二間の建物五棟、竪穴住居四軒、炉壁片や鉾滓(注)馬の足の蹄鉄や釘、馬具の修理が可能、「郡」の墨字が残る土器など発見。

約二十年前、第二次発掘が字名

『再命ヶ市』エリアで行われ、十八棟の相当大きい建物跡を発見。

私は、「高本遺跡」内には、倉庫、市の建物、英多郡司管轄の「伝馬」数定の交通宿泊センターおよび僧堂や講堂、集会所があったと考えるようになりました。「延喜式」(九二七年完成)には、美作の「駅家」名は記載されていない。それ故に「郡司」管轄の「伝馬制」であったとの推定可能。

歴史学者は、各々、「大系日本の歴史2」(小学館)「図説・岡山県の歴史」(河出新報社)「岡山県の歴史」(山川出版社)等の中で、「高本遺跡」(山川出版社)等の中で、「高本遺跡」は、英多郡家(中心政所)や、官の倉庫、国司管轄の「駅家」(五疋)などと書いて、「高本遺跡」||「英多郡衙」||「駅家」所在地説を、一九八八年頃から全国発信してきました

た。(史実検証不十分なのに判明したよう書いてはダメ) 私は、発掘作業を担当された日氏に面会して直接聞くと「江見廃寺が藤生にあるので高本遺跡内に寺が無い事になる、建物十八棟もあるから、英多郡家しか、当時の発掘環境からして考えられなかった、それで「郡」字土器にたよって郡家所在地に判定した。」旨を私どもに口答されていました。

作東町文化財保護委員長、安東靖雄氏は「郡」文字のある土器が一個あったことで英多郡衙の跡と決めるのは飛躍だ」という認識を私どもに文書で伝えられています。『新編作東町の歴史』(一九七七年、高田三爾、道信研爾、守安昭雄編集)には、「郡衙の所在地はいまだ不明である。」とはっきりと書いておられます。

然らば「英多郡家」は何郷村にあったのか。

美作町教育委員会が注目するのは美作町山口で「英多郡の中心地で大領が郡政を行っていたと伝えられる」と書いています。『英田町史』には「英多郡の郡司の頭である大領は財田氏である」と書かれています。江戸時代末の岡山県人国学者、歌人の平賀元義氏は次の如き貴重な記

録を残しています。『此郡家は英田郷平野村にあり。俗に平野の別府ともいふ。此御殿のありし所を今政所という也。』(平野村は現、美作町平福のことで美作町山口とは吉野川をはさんで向い合う位置です。山口は備前への入口であり、林野、湯郷への宿場です。総合調査が期待されま

かたぶし ひよも
片伏・日向(土居)の七人塚について
—美作地方最大の殉教徒—

井口岩勝

ふとした時に、急に思い出すことがある。その一つに、三十年ぐらいたったか、故沖田正秀氏(元校長)から、「片伏の『七人塚』が、津山市

丹後山へ移ったことを知っているか。」と。「灯台もと暗し」とはこの事かと、目をパチクリさせたのを覚えている。

そこは、我が家から三百メートルぐらいい。現、丸尾清人氏の管理地の続きで、日当りのよい南向きの山腹。これがキリスト教の信者、五郎兵衛一家八人のうち幼孫一人を残して七人が、津山藩の役人によって処刑された碑である。

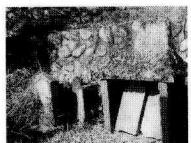


現・片伏の石碑(近景)

殉教者七人塚を津山市丹後山教会墓地に移す
一九五七年
津山カトリック教会
司祭シツプス

- 5、津山基督教図書館五十年誌 S・54・12・10 刊
- 森本謙三 著 S・51・12・5 刊
- 6、キリシタン遺物と豊島石 川瀬 潔 著 H・7・7・7・7 刊

右の書は、大同小異「七人塚」について記されている。
江戸時代の寛永十四年(1637)三六〇年も前のでき事で、今の里人には忘れ去られている。この史実を嘆いた司祭者(坊さん)シツプス氏(ベールギー人)が昭和三年に、丹後山のキリスト教墓地へ、片伏の「屋根型開閉扉付の墓碑」を移転させた。(写真?) この時、「碑近くの故丸尾虎男氏が「ここに『七人塚』があった証がほしい。」との要望で、新しい石碑がつばきの古木の下に建てられた。



丹後山へ移された「七人塚」の石碑から片伏

寛〇年〇月〇〇
〇〇〇禪定門

史実を確かめるために、左の書を開いてみた。

- 1、美作誌 藤卷正之 著 M・45・7・3 刊
- 2、美作禁教史 寺坂五夫 著 S・30・7・25 刊
- 3、新訂作陽誌 矢吹金一郎 著 S・50・6・15 刊
- 4、新編作東町の歴史 作東町 著

- 補1、キリスト教は、明治六年に解放された。
- 2、今から三百年後、いや十年後の世の中は、だれもが心から「平和でなごやかだ。」と思えるようになっていいるだろうか。
- 3、五郎兵衛一家が、処刑された経緯について調べてみたい。
- 4、津山カトリック教会から、五台に分乗十六名がワレー神父を中心に、平成十五年六月一日来訪された。今後、

「年一回は、供養のための墓参を」

との話が出ているとのことである。

太陽と鳥居の関係

横山 征彦

初めて、投稿しますので文章になって居ないか、心配しながら筆を取りました。ご期待に沿えないかと思いますが、ごらん下さい。

今年夏は夏の短い年になる様です。秋の収穫が心配な今日此頃です。

今回の事は神社と鳥居と太陽について私なりに判った事を、皆様へお知らせしたらと思ひ、筆を取りました。

神社のある所又神社が鎮座して居る所は、由来、歴史、伝説、等があるが、その中で、暦の「二十四節気」に係る、神社の鎮座が、作東町内に二ヶ所判明した。一ヶ所は作東町宮原に鎮座されて居る、「天叟神社」、

二ヶ所目は作東町粟井に鎮座されて居る、「春日神社」である。

では、初めに、宮原の天叟神社の説明をする。私の代で神主は廿八代となり、それぞれの代々に言い伝えて来た言葉に「春分の日には伊勢の大神様と一つになる日」と伝えられて来た。春日神社は「山と鳥居が一年のある日に一直線になる」と先代故捷彦が教えてくれた記憶があり、それがいつの日か長い間謎でした。最近になり調査が出来る時間が取れる様になり、疑問に思っ居た事が、段々と判る様になった。

本題に戻るが、天叟神社、春日神社は、それぞれ係わる節気は異なる

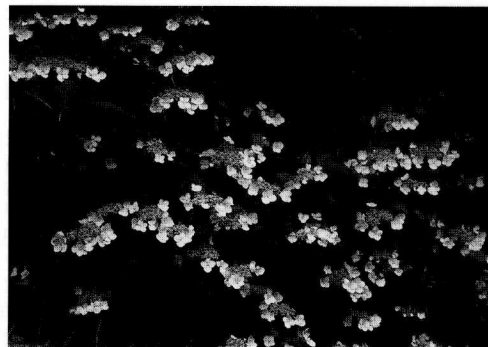


写真 水島正崇

が、いずれも太陽に関する事である。では初めに天叟神社から、説明すると、先代からでは、前は牛飼荒神雨降宮と言われた頃は現在地の境内山の頂上付近に安鎮されて居た。「その位置が後になって大切な事」となる。

その後、安鎮場所を移す為境内地を、ノミと、ツチで切り開き現在の所へ鎮座した。その時神社に大変協力された、親株三十八株に永代に巨り神社奉仕の権利を与え、親株より子株から孫株と組織だった奉仕が昭和の終り迄続いた。

神社を出発点とすると、まず初めに、隨身門より神橋（櫻橋）を渡り、西へ川沿に下る参道が伸び、ほどなく二の御門（鼻高屋敷）と言い伝えられて居る場所、今は道路の下になって居る。場所は宮土居の本田彦三郎

様宅より約一〇〇米ぐらい下の道がカーブになって居る所へ石積みの御旅所が有った。

それより参道は更に、西へ伸びて行き、圃場整備をして以前の面影はないが、殿河内の横野次男氏宅前に三〜四十米程が残って居る。現存する只一ヶ所である。そして小学校東側の田の中に有る鳥居が一の御門となり、鳥居の内側に御門が有ったと聞いて居る。今は北に五社殿して現存して居るが昔の様ではない。

鳥居のある場所と鼻高屋敷が有ったと思う点と神社の場所が一直線になつて居る。これは作東町全図でも確認できる。

その延長線上に、東は伊勢神宮、夫婦岩で有名な二見興玉神社が有り。西に延長すれば、出雲大社、その先は日没で有名な日御碕が、日本地図

に定規を当てると、一線上になる。そのほば、中間の位置に、天叟神社が有る事が判った。日本地図に定規を当てれば、誰でも判る事である。では、何故その様な事が大切な事かをこれより説明しよう。

わが国は、一年を通じ四季が有り、それには、さまざまな区分法があるが、その一に、春とは、春分〜夏至前日（三月二十一日〜六月二十一日頃まで）夏とは、夏至〜秋分前日（六月二十二日頃〜九月二十二日頃まで）秋とは、秋分〜冬至前日（九月二十三日〜十二月二十一日頃まで）冬とは、冬至〜春分前日（十二月二十二日頃〜三月二十日頃まで）を言う。

暦上では、いくぶん変わり、春は立春〜立夏前日、夏は立夏〜立秋前日、秋は立秋〜立冬前日、冬は立冬

立春前日を言う。であるから春の区分、夏の区分、秋の区分、冬の区分がお判り願えたと思う。では、暦の二十四節気と太陽の関係を少し述べておかないと理解しにくいと思う。

立春は旧暦の正月、新暦二月四日頃（節分の翌日）である。天文学的には黄経三二五度の点を太陽が通過する時を言う。雨水は、立春後十五日目にあたり太陽は黄経三三〇度の点を通り、啓蟄は、新暦三月五〇六日頃で太陽が三四五度の点を通り、春分は、三月二十一日頃で太陽が黄経〇度（春分点）を通過するときを言う。清明は、春分後十五日目にあたり、新暦では四月四〇五日頃で、太陽が黄経十五度の点を通り、穀雨は、新暦四月二十日頃で太陽が黄経三〇度の点を通り、立夏は、新暦五月

る位置）所で、太陽は真上となり、その日は、出雲大社の西に当る、日御碕へ、太陽が沈むこの現象が、春分の日を中心に、二日有る。当日は、伊勢の二見興玉神社の夫婦岩の中心より太陽が登る事を聞けば、神話に（日本書紀）出て来る、天孫降臨の事が思い出される。神話を簡単に話すと須佐之男命（出雲大社の祭神）が世の中を荒らしめた事に、天照大神（伊勢神宮の祭神）が嘆き孫の瓊瓊杵尊を世の平定に猿田毘古神を従え、高千穂の国へ降りられた。その時前を祓い清めたのが猿田毘古の神（天叟神社のご祭神）方除けの神様（生活の水先案内を司る氏神様）、伊勢神宮天照大神、天叟神社猿田毘古大神、出雲大社須佐之男命が一直線上になる事が、先人の知恵と思えば大切に後生に伝えなければと思う。

五日か六日頃で太陽が黄経四五度の点を通り、小満は、立夏後十五日目にあたり新暦五月二十一日頃で太陽が黄経六〇度の点を通り、芒種は、新暦六月五〇六日頃で太陽が黄経七五度を通過するとき夏至は、新暦六月二十一日頃で、太陽が黄経九〇度の点を通り、秋分を言う。

太陽は赤道から最も北に離れ（赤緯二三度半）、北半球では南中の高度が最も高くなり、北半球では昼が最も長くなり、夜が最も短くなる。ここで、太陽の黄経について、地球上の一点から黄道に下した大円を、春分点から測った角距離。赤経と同じく、春分点から東の方へ測る。黄経。赤経について、地球上における星の位置を表す座

次に、作東町栗井に於て、太陽と鳥居の不思議な現象が判明したので報告しよう。場所は、二子山と春日神社の御旅所と田淵に有る鳥居の関係です。先に申し上げた、夏至の太陽の位置を思い出して戴きたい。新暦六月二十二日頃で太陽が黄経九〇度の点を通り、前後二日の間、栗井田淵の鳥居から、御旅所、二子山、太陽が一直線になる事です。そして鳥居の敷地に、三葉の松が有り、その延長線上に（すこし北よりではあるが）自生の三葉の松が、三本有ると言い又不思議な所が確認出来た事です。

思うに先代達の言い伝えは、やはり本當の事が有る。それは自分で経験しなければ、本當の事はわからないという事。事情のわからない人達によって道路を計画し貴重な遺跡が

標のひとつ。

地球上の赤道を基準とする。星を通過する経線（時圏）と春分点を通過する経線とが天の北極においてなす角度。

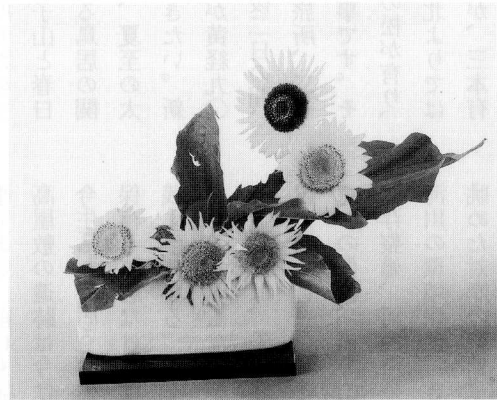
春分点から東に測り、〇度から三六〇度、または〇時から二四時まで。赤緯（春分点は）地球上に於て基準となる点・その中の〇度（広辞苑）以上で、二十四節気と太陽の関係は終り、此より現況に入ろう。

春分の日と春分〇度のつながりは理解して戴けたと思う。その現象が天叟神社で有る事が判明した。まず春分の日、前日より、小学校東側に有る天叟神社一の御門の鳥居の位置より東を仰ぐと御来光（日の出）が鳥居の真心より登りその日の〇時頃には神社の奥の院に石積み印が有る、（前に出て居る、牛飼荒神雨降の宮、跡地の北にな

無くなるうとして居る、誠に残念な事である。前にも記したが例えば鼻高屋敷の遺跡は今は見ると影もない。今生活して居る者が知恵を出し合い、保存して居なければ、後世に汚点を残す事になる。無くなれば歴史を知らせるすべもない。次に付け加えて戴けば、先代達が汗を流した、風穴場（昔蚕を越冬の為に入れる洞窟）の保存、吉野山の地獄、極楽の保存整備、河内川のほたるを繁殖し河川の環境保全、きんちゃん館より眺めた対岸の整備、豆田から大聖寺に至るハイキングコース等の整備等々一歩さがって見なおすと、良い知恵も湧いて来るのではと思う。甚々勝手な思い付きを書き誠に恐縮に思います。一言と思えばペンを走らせました。

短 文 芸

生きている
あかしとしての
自分の思いを
自分の言葉で
表現する
その表現が
万人の魂を
ゆり動かす
短文芸の力
伝統文化の力



生花 樽井悦子

詩

賀初日高原台

霧晴高原台霜満
篝火天届神龍如
江玉昇来万象新
元旦暁万歳三唱

光 辻 猛 美

霧晴れて高原台は霜満ちたり
篝火は天に届き神龍の如し
江玉昇来たつて万象新なり
元旦の暁万歳三唱

平成十五年元旦高原日の出祭りにて感じたまま七言、
四行、漢詩ふうに綴ってみました。

紫陽花

年どしに挿木して
ふやした紫陽花
家のめぐりに咲き誇る
雨に打たれても
雨に打たれても
色とりどりに咲く花

本 田 あきこ

感謝を忘れた今の社会
日日のニュースに心は沈む
なれど明るく前向きに
生きてゆこう
紫陽花のように

ここは作東くにざかえ

小林 亨

一、あいし あいし きよいきよい (囃子)

ここは 作東 くにざかえ
うちの 嫁ごは 播州 生れ
泣いて 別れて 峠を越えて
抜けぬ 訛が 愛しゅうてならぬ
じよれじよれ ぼうーぼうぼう (囃子)

二、あいし あいし きよいきよい

ここは 作東 くにざかえ
山が恋しゅうて 見晴す果てに
東 大撫 西しや 那岐の山
朝焼 夕焼 心も はずむ
じよれじよれ ぼうーぼうぼう
三、あいし あいし きよいきよい
ここは 作東 くにざかえ

春は辛夷ごぶしに 秋や織る錦
笛と 太鼓に つい誘われて
村の祭りにや 獅子まで舞うよ

じよれじよれ ぼうーぼうぼう

四、あいし あいし きよいきよい

ここは作東 くにざかえ
播州 上国 作州は下国
誰が云んさる 面憎や
住んで見んさい 極楽世界

じよれじよれ ぼうーぼうぼう

※囃子言葉、農耕で牛を役っていた当地の号令、牛は家族の一員であった。

ススメススメ 左へイケ左へイケ 右へイケ右へイケ
しっしっ あいし、あいし きよいきよい

アトヘアトヘイケ トマレ、トマレヨシヨシヨシ
じよれじよれ ぼうーぼうぼう
「楽譜あり」

兄ちゃんへ (亡兄への詩)

田中清一

せかずに言えはいえるのに
吃りだどもりだといじめられ
はぐれた蟻ありと砂あそび

強いみかたの兄ちゃんの
むかえしやがんで待っている
泣いてぬらしたわら草履ぞうり

だっこで笑う兄ちゃんが
見かえすこともまたくると
なめあう涙の飴んだま

おんぶはぬくいよ兄ちゃんの
せなかで歌う「赤とんぼ」
ゆっくり流れるひつじ雲

ぼくおもたいよ兄ちゃんにや
はだして草道くさみちあるけるよ
つなぐ手と手に切れ草履

おもしろ調子の兄ちゃんと
おおむ返しおむかえしの「もも太郎」
すらすら話せた鬼おにたいじ

いろりで聞かせる兄ちゃんの
笛は心の助人すけとさ
かげでもらったこの力

はだして蟻ありとあそんだ子
やがて自分の根性こんじやうで
とうとうぬけた蟻地獄ありじごく

俳句

夕蛙

青山元江

捨て切れぬ百姓されど鍛始め
一言が過ぎて鋭き水柱かな
こぼれ種鉢にうつして四温かな
寝たきりがヨチヨチ歩き山笑う
村中の田がつながりて夕蛙

初蛩

山本登山

秋霖や長編小説読み終る
鳩一羽悠悠小波立て行けり
猟期閉じ山静寂となりにけり
鶯の声を背にして山を守る
夜会への歩みゆるめり初蛩

徳不孤

大桂之

書道 真野みよ子

兄と弟

遠藤綾女

おさがりで済む弟の更衣
悪知恵もついて日焼のお兄ちゃん
子育てに一喜一憂星まつり
夏休み子を叱る声諭す声
二人の子しばし平穩昼寝かな

野菜作り

加藤美雪

庭の木の剪定すまし空が見え
負けないぞ冬菜凜とし畠に立ち
老いて尚野菜作りを初仕事
幼児等の姿を写し年賀来る
老木に一輪と梅今日も咲く

芥子坊主

長家克子

啓蟄の叩いて履きし作業靴
足幅で測る間隔芋を植う
傘寿二人ことばを交し柏餅
若武者の並ぶがごとく芥子坊主
からみあふ豌豆の蔓解きほぐす

田植水

坂井はつ子

溝さらふ二日も三日も草刈って
五反田の水口祀る女郎つつじ
がうがうと暗渠響かせ田水くる
もんどりを打ち直角に入る田水
とりあえず畦にべたんと余り苗

花八ツ手

高橋 やえ子

廃屋の庭に盛りの花八ツ手
吹き飽きて忘れられるやしゃぼん玉
子供部屋笑い止まらぬ日の盛り
起き抜けの顔にぶつかる蟬しぐれ
なごり雪ふと消えかかる笛の音

梅雨晴れ間

杉本 幸子(土居)

吟の師の訃報知らざる霜の朝
風邪に臥し独り住いの梅茶かな
花吹雪受けパスのよな電車過ぐ
梅雨晴れ間指先染めて梅を干す
紫陽花の色鮮やかに梅雨晴れて

秋近し

森本 久子

風鈴の風の匂や夏の月
眠らざる夜半の稲妻夏の雨
木の葉散る大空舞いし秋の朝
葉月の残暑の日暮れ秋近し
さわさわと谷間を吹く風昇る月

道

坂部 金治

木の子狩杖を友にと登る道
秋灯下目を細くして辞書を引く
稲の花声の向うに覗く顔
四国路や芽吹く道辺に鈴の音
御み籤が吉と喜び山笑ふ

田舎も佳し

山下 照夫

老鶯は逝く春惜しみ声枯らし
時鳥来るを待ちかね早苗植え
梅雨寒にはやひぐらしかいと淋し
親燕息もつかずに餌を運び
啄木鳥は二羽寄り添いて曲芸し

春めける

井口 祥子

建前の槌音高し冬の空
野良帰り少しずつ延び春めける
菜の花や姪の出産日も間近
鼻歌も口ずさみたく青き踏む
葱坊主頭巾かぶりて稚児の列

俳句五句

安東 和子

鶏頭蒔く種よろこんで落ちにけり
あまり苗かりそめならぬ根づきかな
冬帽を目深に野暮を決めこみし
花八ツ手結び目かたき荷のとどき
梅もどきくわっと夕日の木となれり



江見小学校 河原沙采

座右の書

宿野淑子

座右の書心の砂漠にうるほひを
帰省する吾子を迎ふる遅桜
教へ子の死を悼むごと八重桜散る
教へ子とワイン楽しむ夏の宵
大寒や花よし香よしらふばいは

絵馬

春名波留夫

佐保姫の衣擦れと聞く微風かな
螢火の音もなく闇深めけり
青嵐太柱立つ上棟式
初霜やこぶし固めて旅に発つ
冬隣絵馬の朱色も色あせて

茅の輪

江見和巳

老人が茅の輪作りて祭待つ
盆来るつきぬ思いや夫婦箸
虎の記事毎日見せて慰める
和服など総べて不用の物数多
打ち水をする日もなし長の梅雨

春夏秋冬

原田順子

付添いの合間お出掛け春シヨール
絵に残す友より賜いしシクラメン
左右廻したくなる白日傘
読みきれぬ本で埋める夜の秋
冬障子又来てやぶる孫を待つ

廃城令

春名静山

葉櫻や廃城令読む資料館
松陰を偲ぶ旧居や春惜しむ
水澄める川に群なす錦鯉
大豆扱ぐ昔の音の稲扱機
歩きそむ孫の写真や立葵

大夕焼

山本緑

東雲を分けて眩しき夏至の日よ
大夕焼燃えつゝ落つる大暑の日
朝からの喜雨となりたる野菜畑
庭石に尾を振る雀の小春かな
檀家寺の大銀杏浮き秋昏るる

猫

黒藪貴

生かされる酸素吸いつつ春炬燵
寒越えし思いに弾み朝戸繰る
猫起きて春の朝餉の顔揃う
薫風に紫煙くゆらす至福なり
一山が割れしかとひびき雷怒る



土居小学校 岩本 明

川柳

柱

春名静山

ご近所へ子供が喋る内緒言
種薯を切る芽を探す老眼鏡
軽いかも知れぬお礼の品定め
無理するな別れ言葉が温かい
一城の大黒柱として老いる

燕の巣立

江見和巳

取込みて燕の巣立知らぬ間に
鹿が出て稲をば喰むと聞きあきれ
独り居に茄子や胡瓜がなりすぎる
娘らの為しばし生きなん余生なり
悲しみはきゆる事なしさみだるる



生花 樽井清江

雨

山本昌子

小窓打つ雨にも心乱される
高野では魂あらう雨と受け
同じ雨降り込みですと喜ばれ
相合傘片袖ぬらす初デート
ドッコイシヨ言わずに働く俄雨

明暗

山下照夫

北島よ慢心せずに五輪まで
国技とて相撲外人上位占め
憲法をないがしろして派兵する
大国のエゴに日本も尾っぽ振り
年齢経らば晴耕雨読念ずるのみ

那岐ごめん

小林亨

姫新線やれ帰ったぜ作東弁
三世代便座は温し孫のあと
作州の並び小便那岐ごめん
総集編又も泣かすかおしん殿
八十路日はとく暮れて道遠し

話のたね

衣笠隼巳

効くはずも無いのに信じて買う薬
飼い主と同じ悩みの肥満猫
飲む席に一人はほしい飲めぬ奴
下駄箱の前で始まる愚痴談義
一言と言って話を蒸し返し

身内悲喜

山下光子

初対面出しゃばり好きも澄まし顔
豆台風来た言うてた孫玉の婚
爪に灯を点すに亡夫が助け舟
しばしばの夢に共夜の亡夫と居る
身内悲喜つづいて廻す独り独楽

八十路坂

春名房代

同窓の親友逝き寂し八十路坂
クラス会童顔どこか残りおり
自分でもびっくりするよな歳となり
古い友とゲートボール遊び楽しい日々
今日ひと日健やかを謝し寝に就く

愚痴

遠藤綾女

愚痴愚痴が自慢に変わりよくしゃべる
老二人愚痴こぼし合い暇潰し
思いきり愚痴をこぼして自己満足
病院で知らぬ人愚痴こぼしてる
二つや三つ愚痴はあるある嫁姑

日本男児

山本登山

仕舞風呂一つの柚子を香いで見る
運不運投げた硬貨の裏表
俄か雨バス停に待つ母と傘
鯉のぼり日本男児の声がする
平静を装い上がった手術台

合併

黒薺貴

通知簿の甲乙丙がまだ生きて
合併で由緒の名前消えてゆく
横綱が行儀悪いと叱られる
鴉らは山より街へ逃げてゆき
合併は沙汰止みとなるそれも良し

男と女そして仏

原洋一

なるようにならぬ男の粘土細工
男一匹正気狂気の狭間行く
キラキラと悩んで女盛りです
青天の霹靂などと言う仏
煩惱を抱いて野仏風の中



粟井小学校 安東由利香

短歌

風にひよろめく

三木 泰葉

にびいろの夥しき羽毛あさあさに落ちるる見れば口ごもるなり

失意にも似たる思ひやひすがらを雄蕊除きし百合のにほひ来

眼つむれば闇に蛍のとびかひていちにんの病ながく思へり

いましばし時鳥の声聴きてるむ渡りゆく日も近くあるべし

睡びつつ低く群れるる秋蝶のひとつがふいに風にひよろめく



写真 青山時弘

魅せられて

原 洋一

生きるとは濁ることだと君は言う少女のような瞳見据えて

我が腕のゆりかごに揺れまどろむ児柿の若葉の風と遊べや

その赤き実りの色に魅せられて四十本のトマトを植える

そばに居るだけでいいわと言ったくせに今ではそばに寄り付きもせず

ボケないであなたこそねとお互いに想像している介護生活

青き銀杏葉

加藤 幸子

ひと工夫されたる料理の番組を夫と見てをりやや気の退ける

花散りて若葉色濃くなりゆくに折れたる友の骨は付かずや

青竹を抱へて行けり割りたての青き香りが鼻をつき抜く

菩提寺の風はことさら荒れたるか青き銀杏葉地を埋めたり

ひと鍬に雨滲む土の抉られて女郎花の根地表に出でつ

折り折りに

安室舜海

牛を飼ひ春蚕を掃きて倦まざりし先人の姿今
に忘れず

長き長き減反やめて日本は瑞穂の国を誇りと
せむか

合歓の木によぢ登りゐし凌霄花遂にきはめぬ
高き木末を

「ハリアツプ」と責めらるる度捕虜たちは
「ユックリ」と言ひて憂さをはらしぬ

世の汚れを聞きて帰ればきびしくも耳洗ひけ
る古人ありにき

八咫の鏡

江見和巳

発掘の八咫の鏡の霊地なり永遠とわに標しるさん石
碑ぶみ建て、

寝返りのこつを覚えし曾孫ひもとがあれよあれよで
繰返しつゝ

天保の飢饉の古書を繙ひもとけばあつき涙がほおを
伝いぬ

山中に毘沙門天の倒れあり起しまつらむ人は
誰なる

永き日をつれあいたりし妻逝きておもかげ去
らじあした夕べに

赤蜻蛉

春名静山

父母の眠れる山と真向える吾が家の門かどに赤蜻
蛉舞う

休耕の棚田は荒れて夏草の茂みに畦の定かに
見えず

牛売りて三十余年を経あしたし朝仔牛生まれし夢に
覚めにき

燕飛ぶ門に苗箱並べつつ今日を佳き日妻と初
蒔く

試作にと友のくれたる交配種稲の一穂に三百
余粒



吉野小学校 木下典恵

戦後すぐ総貧因で現在は総中流の日本の生計くらし

沖繩はさくら祭り水戸は梅札幌雪と祭り様
様

のろまでも我れ万年を生きるぞと兎に勝ちし
亀は意地張る

いにしへの十二単衣の官女達ビキニの女如何
に見るらん

乳腺のがんと診みられし老い猫の死期の近きを
そつと撫でやる

イラク攻め大義も無くて開戦し勝利宣言すれ
ど片付かず

不景気に若くて生命絶つ人の遺のちこる家族の心
やいかに

人殺あやむる年齢としは日各に低年化十二歳とて例外
でなし

駄作をも待ちて読まるる人のあり感謝をしつ
つ日々に精進

酒造り半世紀経て幕閉じぬ我を支えし人々に
深謝

思ひのままに

横山 昌子

鍬ふるひ種を播きては草を取り夫との年を重
ね来たりつ

手間かかる山畑なれど捨て難く今年も小豆を
穴あけて蒔く

ゆつたりと弧を描きつつ流れゆく吉野川の土
手わが散歩路

ほとぼしる飛沫の中に浮ぶ虹花壇に水を撒く
つかの間を

五十五年ここに住めども夢に見るわが家はな
ぜか故郷の家

忘るることなし

加藤 保子

朝より深き青空五十七年前の原爆の日もかく
澄みてゐし

原子雲きのこの如く立ちし空この現実を忘る
ることなし

敗戦の日の暑き真昼を音絶えて夾竹桃の花赤
かりき

忠魂碑の名を丹念に読みつぎて若かりし顔俣
びつつゐる

冷夏にも猛暑にも耐ふるか曼珠沙華稲田を囲
みて遠く続けり

牛蛙

杉本幸子(土居)

此の川も昔は蛍の乱舞せしに今は多くの牛蛙
住む

一匹の迷い蛍の見えぬかと川辺に立てば牛蛙
鳴く

瀬戸の島大橋見ゆる湯の宿の露天湯の前船の
過ぎゆく

桑の木の実をついばみし群雀足音させぬにパ
ツと飛び立つ

うたた寝を叱りくれたる主あるしなく寝るも起きる
も独り気儘まかせに

今生の別れ

小林 亨

強制連行も拉致も哀しゑ昭和史を繰れば聞こ
ゆるやからの嘆き

昭和史を重ねたどれば痛ましや正義とは何イ
ラク撃つ弾たま

「餅食べね」泣きつゝ母は勸むるなり今生の
別れ宮庭みやてに盈みつ

「戦争はすまじ」と兵の惨かたる全校生徒四
十二人に

馳せよりに弾傷撫づる児こら愛めでし兵の日かたる
吾が細き膝ひざ

孫寿ぎ

山下光子

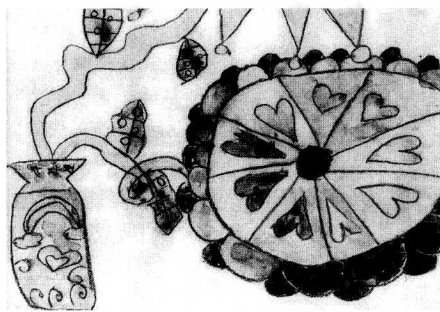
朝もやの山の端旭昇り出でホテルの池面に真
赤に浮びぬ

幼より目指しし親子の苦楽花孫兄弟共妙なる
寿ぎ

大歓声拍手に外に眼をやれば王子王女の仮装
車登場

孫の披露宴双方友の演奏に王子王女もパツハ
奏でる

孫連れ添う伴侶はまるで天女の如亡夫導きし
かこよなき嫁御



江見小学校 森 栄子

鳥形節子

春きたり優しき友の絵手紙に涙あふれぬはげ
ましの一首

光呼ぶ広き大地に足をふむ我の喜び今日の笑
顔よ

見ゆるものみなうつくしき春の朝あまき香風
今日も元氣ぞ

起き出でて今日のリハビリと進む道花に呼び
かけ笑顔笑顔に

咲きほこる折りをりの花に光さし吾の心にさ
さやきくるる

石生さだ子

蒔かぬ種どこから来たの名無し草大輪の白ひ
と日馥郁と

叩く雨梅雨の終りの激しさに耐えきれず倒れ
て花葵咲く

夫征きて身重で歩きし五里の道発ちて逢えず
に永遠の別れに

アナゴ飯嫁が届けし重箱に老夫婦の箸は忙し
く動く

独裁者捕えぬままに幾万の財と民を犠牲にす
るな

故郷

荒尾 志^と志^え

幼き日友と遊んだあの小路思ひ出多き故郷の
山

故郷の墓前にかざりし山ゆりの香りゆかしく
ほのかににおう

夕闇にはたるおいかけたわむれた幼き日の故
郷の路

あぜ路に赤いじゆうたんまんじゆしやげ摘ん
で遊んだ母のおもかげ

山合にこだま響いた故郷のコスモスゆれるた
んば路かな

収穫の一日

船曳 彩

家中に玉葱の香のみなぎりて収穫の一日心地
よく暮れぬ

足腰の痛みを忘れ玉葱を括りし一日さはやか
に暮る

土間一面広げて乾かす玉葱の香り目をさす収
穫の一日

若き等に助けられつつ千個余の玉葱括り涙を
流す

取り立ての玉葱の香をそれぞれにあの子この
子と送る箱詰

角 利津

清滝きよたきの細き流れの源は大將ヶ陣しんで猪の栖すまむ山

古里の春の香りを届けむと夜の厨くに落味噌を炊く

享保より明治大正昭和へと移ろひ見せて雛の面差し

夫の振る竿に叩かれて落つる梅に背を打たれつつその梅拾ふ

故郷に父母は在さず柱時計の刻を違へて打てるその音

小林 増代

今日もまた何も出来ずにぼんやりと西へ行く雲をただに見てをり

鴉には鴉の思ひあると見ゆかほかほかあかあ明るく暗く

病みながら亡き母の年乗り越えて八十路の坂を一つのぼりぬ

「大地の子」見しより脳裡に焼きつける上川隆也これが初恋

若き日の佳きことのみを思ひ出し暗き余生の光ともせむ

さはやか五月

角南 三津急

ぶるると若葉風切る郵便夫が山里に見え隠れつつ

ふらここを競ひ合ふ児の頬赤く風も光れり今日木の芽晴

茶摘みする乙女の姿初初しわがふる里は新茶の季ぞ

静かなる山間にこだます遠吠えは猪を追ふかやハンター構へて

シクラメンは聞き耳立つるごとくにてハウスの中に競ひて咲けり

わが里

安西 苑

水色の朝顔一輪咲きにけり故郷の深き海の色に似て

谷の空薄ずみ色に暮れゆけば吹き来る風は雨を呼ぶがに

まだ暑き日はつづけども夕風が青きすすきの秀を渡りゆく

草生より蟬の亡きがら拾ひ来て掌に乗せ見れどその目は閉ぢず

地にわが影空に愁ひの雲流れ静かに静かに暮れゆくわが里

紫陽花七変化

森本久子

夕されば庭の紫陽花七変化みどりを藍にかへしてをりぬ

ちかちかと梅雨雲ありしが吹く風におされて
星空見えて来にけり

日の暮を梅雨空深き田舎町四方結界に鐘の音
ひびく

病みをれど眠る幸あり夫にも目ざめし時の心
さやけし

目ざむれば命ありけり露ふかく笑のある日々
心に誓ふ

草もみぢせり

横山すみ子

春嵐に勝ちしと言ふか裏山の木木は穩しく春
陽あびをり

わが庭の小さき木陰にいこひつつ老鶯の声に
しましを過ぐす

枕辺の時計の刻むたしかなる音を聞くなり病
床寂か

我の手の届かぬままに一枚の畑は見事草もみ
ぢせり

木枯に散りつくしたる落葉搔く今年逝きにし
人を思ひつつ

四国遍路のつれづれに

名部和子

白き波涛牙むくごとく打ち寄せて足摺岬に雨
降りやまず

遍路寺の鐘つき堂の鐘ついて両手合はせて頭
を下げる

改築の札所の寺に一枚の瓦寄付して幸福を祈
る

旅の宿の障子をすきくるほの明りに覚めて聞
こゆる遠き潮騒

海見ゆる露天の風呂に友と入る四国遍路の終
りの夕べ

早春

新井和代

青空を待ちわびたるか鶯二羽が戯れるごとく
悠然と舞ふ

春浅き松江の城の堀めぐる遊覧船に粉雪が舞
ふ

バチバチと無気味なる音に山火事が真黒き煙
を立てて迫りく

千年の長きを生き来て時空を見し醍醐桜は何
思ひるむ

聞きおけばよかりしことは多くあり聞かざり
し吾母に詫ぶるも

白き連峰

名部 みどり

越中の旅にみてより忘れえぬま白き連峰は今
雲の切れ目に

金色の扇子ステージの空に舞ひいつしか寄り
来て大河と化しゆく

出演の時迫り来るに白足袋の足に馴染まず深
呼吸のみ

俯きて腋芽とりある瞬間の間を飛行機三つ天駆
けてあり

夕風に放牧の仔牛が行く我のあと追ひ来ぬ瞳
うるませ

折に触れ

鈴木 秀子

任地へと戻りゆく子の後髪細りてをりぬ夫に
似ざりし

小声にて子守唄など口ずさみ娘が残せしセー
ターほどく

手毬つき競ひし友は世に在らじ広き庭なる家
跡に立つ

過ぎ去りし時の重さを戴きぬ喜寿の祝ひを賜
びたる吾は

ある時は切つて捨てたきこの脛を今宵の湯舟
になだめてをりぬ

われも生きて

原 幸子

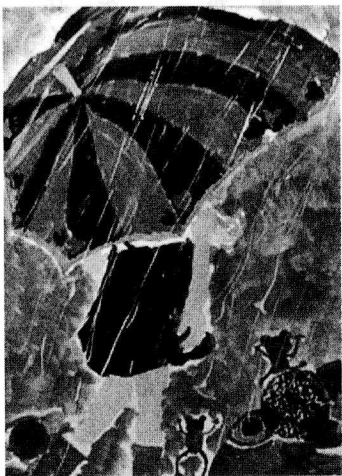
棚田吹く風は優しく早苗なで田植ゑ終りてく
つろぎてをり

朝まだき鶉はピイピイ鳴きたてて椿の花粉に
頬を染めぬる

霞立つ向ひの山に高く咲く桜をわれも生きて
眺むる

紅葉なす山山の上の茜空鷺は一声鳴きて飛び
行く

二つ三つ残りし柿を啄みてゐる小鳥は仲良く
何をささやく



粟井小学校 内藤あさみ

リハビリの思ひ出

光井 つや子

つたかづら垣根にそひゐて新芽立つ春の息吹
の満ちゐる如く

山の木木緑こくして初がつを夕げの膳に子等
集ふなり

梅雨曇る能登香の山の裾野にて早苗植ゑにし
七十年前

温泉帰りの粟井川の上に蛍とぶびかびか
か貴重なる光

リハビリと眠れる足に鞭うちて二メートル余
歩く杖を頼りに

アルバム

岩本 敏子

リハビリにゆるゆる歩む病み夫を励ます如く
竜胆ゆれをり

目の届く位置に病む夫休ませて棚田の稲に案
山子を立てぬ

健やかに生きし日のアルバムめぐりつつ病む
夫の頬に涙一すぢ

バリアフリーに改造せしを喜びし病夫は半年
生きて逝きたり

良きことも悪しきことにもほほゑみて答へて
くれし夫は世に亡し

般若寺

宿野 和穂

早ばやと取り入れすみし村むらに作州黒の幟
はためく

溪流の水嵩増しみて冬立つ日般若寺の木木は
赤く染りをり

那岐おろしは身を切る様に吹きぬけて遠き山
脈白くなりゆく

僧の吹く法螺貝の音が狼の遠吠えに似て深山
に響く

一年の汚れ落しの洗濯を終ふればテレビの歌
が流れ来る

七色の花

山下 三代子

大撫の連なる尾根のかすみゐるて広場のラベン
ダー冬仕度終ふ

福寿草は大寒の朝をもこもこと土の中より春
告ぐるなり

冬枯のまゆみの枝に四十雀群れてついでばむ茶
褐色の実を

畦道に薄草色の落のたう三寒四温の里を彩る

雨止みてさしくる光に紫陽花の花びらの露七
色に光る

帰省せぬ孫らの顔のよぎりたり餅数へ居る厨
広きに

晴れし日も木枯の日も影のごと添ひ来て五拾
年夫婦のアルバム

姑の「十八」聞きつつ田植してはや半世紀な
ぜ姑恋ほし

幼らの手より放れし風船は故郷祭の便りを乗
せて

三度通ひ残り火消えしを確かめて柏手を打つ
春日神社に

杉林の木下闇に繁る羊歯行けどもゆけどもた
だ杉ばかり

「気を付けて行きおうし」と言ふ熊野人丸太
の橋は朽ちてはるぬか

行きゆけど陽の光見えず湿りをり蛭降峠名も
おぞましく

付き来るものを荒き呼吸に確かめつつ黙々と
運ぶ一足一足

明けやらぬ音無川の彼方にて大斉原はただ黒
き森

節分草

河原に自我のあるがに並ぶ石の丸くなりたる
歲月憶ふ

老鶯の声絶えたりし峠みち処暑とふ日の風す
ぎゆきにけり

耐へをらば鶯来りて啼くといふ引きしおみく
じを指針となさむ

ふふむあり咲き盛るあり散るもあり山茶花は
冬の庭にはなやぐ

雪かぜに怯まず咲きて春を告ぐ節分草はけな
げなる花



吉野小学校 春名浩司

日下 智加枝

白根葵のうすむらさきの花びらがまぶしさう
なりこの世のひかりに

青竹の気のすむまでを伸びてゐるホテルの赤
い屋根を隠して

北空を奪はむとする入道雲すぎしも今も喧嘩
は苦手

老神主の足袋の破れを何故に思ふ終の花が散
りつぎ

ほつりほつりと燃えかすのやうなふゆざくら
老女の歩みはまだ橋の上

横山 美恵子

鹿でなく猪でもなし足跡のさては熊かと背筋
凍りぬ

昨日までの鈴生りの柿は一つのみ木守りとな
りて我を見下ろす

猪よもう山芋は食ひたるか毎年大穴掘りて五
年目

雨上がりにも又もやられし馬鈴薯よ猪ながらそ
の技のみごとさ

猪が土橋にあけたる大穴三つはたと困りぬ夫
亡き今は

奈摘 葉

薫風を共に受けつつ記憶には残してもらへぬ
視線を交はす

行き交ひしものの重みを吸ひ込みし線路跡な
る石の鈍色

電線に絡みたる蔦を切りしといふ保安員は青
草の匂ひ纏へり

シリーズ開幕戦は雨の中「湯郷ベル」よたを
やかに蹴れ

待合室の退屈なる視線が追ふものは娘に押さ
れゆく車椅子のわれ

黒石 登代

眼裏に舞子の浜の夕つ日の残るも茜の吾が邑
も良し

山峡のうす茜して暮るる邑今宵は魚の焼く香
を流し

又ひとり邑人葬る吾よりも若き人にて梅の香
の中

救急車消防車をば通すべく邑の馴染みの桜伐
らるる

降りて来る雨は静かに邑濡らし何処より湧く
霧のひとすぢ

母

江見 真智子

初なりの桃三つ四つを携へて車急かせり母の
もとへと

青き田を舐めて近づく突風に下校途中の黄の
帽子飛ぶ

今日もまただめ押しのごとく雨降るに咲きあ
ぐねる朝顔の花

一握いちあくの古米を撒けば忽ちに電線素引くは百羽
の雀

とりどりの色に咲きあつまり草主亡きこ
とを知るや知らずや

慟哭に似る

北村 和子

道のため移転止むなき地藏様がユニツクに吊
られ空をゆらゆら

北風を遮りくれし竹叢も立木も伐られて寒風
荒ぶ

数多の木切りて道を広げしも忘れ去られむ杳
き日となり

唐突にその妻逝かしめし若き師の葬りの言葉
は慟哭に似る

「かあさんの分まで元気で生きるよ」と幼き
男の子の無邪気さに泣く

夫

新免 初子

夜半に鳴く遠き梟の声聞けば戦前戦後を常に
想ふも

お互に蔓を伸ばしてドッキングメロンは南瓜
の葉陰に実る

遅れてはならじ越えてはならじとぞ尚も歩幅
を合せむ夫に

みどり濃き照り葉ごもりにうす雪添ひて紅牙
えて山茶花咲けり

喜寿近き夫がバイクで出で行くを無事にあれ
よと朝を見送る



江見小学校 山本正義

紫色の花

長澤 和枝

明日香路の旅にゐるなり足下に紫色の姫踊子草

客さりて食卓の上の紫花菜のその紫も静かになりぬ

向山も村も呑むがの濃霧なり紫木蓮ほのかに香る

ながもちを願ひて供花のスターチスの紫はゆる夫の墓処に

山裾にむれて咲きゐる秋丁字風わたりきて紫色の色

折をりに

黒石 貞子

幾重なす山巒這ひて昇る霧木芽ぶかしの雨となりゆく

遠く啼く仲間の声にこの鴉首をかしげて松の枝ゆらす

入りつ日の水面の光りゆらしつつ親鴨に子が従ひてゆく

雨の気の未だ上らず仰向けば梅の新葉がつぶら実抱く

隣家に住みつきたりし老い犬は「祝敬老」の座ぶとんの上

一寸先は闇

阿部 すみゑ

唐突に心筋梗塞の発作ありて手術なすなり予想だにせず

「一寸先は闇」と常づね思ひ来て吾の心臓手術は夢にも思はず

「死線越え戻りしお前に乾杯」と夫は手酌で杯重ねをり

命得て今宵わが家で夕餉とる歎びくるる夫の傍へに

夫の喜寿に旅を約せしことも夢花は散りゆき若葉が繁る

谷渡りゆく

中川 富美枝

手の内のコーヒーの香の消えぬ間を桜の花の幾ひらが舞ふ

夕立に濡れて緑の鮮やかなり鯛ひとつ鳴きたちをりて

等間隔に雀おどしの空砲が峽をゆるがす明けそめしより

高く低く楓の紅の一ひらが谷渡りゆく風にまかせて

しんしんと粉雪降りて堀ぎはに寄り添ふ落葉深く隠しぬ

乾杯

末宗 千歳

疾風にもぎとられたる桜花芝生の上に咲く如くあり

闇の中ライトアップに照らされて桜満開惜しみなき乾杯

軒下に燕の声の姦しく夕映の空を一直線に切る

伊根の船家肩よせあひて並びをり潮の引きゐて人影見えず

カーナビのままに來たりしこのホテル海の香のする夕日焼けをり

遍路

徳野 富美子

法螺貝の響ける中を遍路なる我も下船す大師に従きて

遍路道に継子落しとふ崖ありて谷底暗し海光れども

山肌を鎖を持ちては這ひ登る霊場におはず笠ヶ滝不動明王求め

立春となりて温きや姫らが声弾ませて遍路道ゆく

小豆島の産道のごとき遍路道くぐり抜ければ海広ごりぬ

さへきの世紀

坂井 はつ子

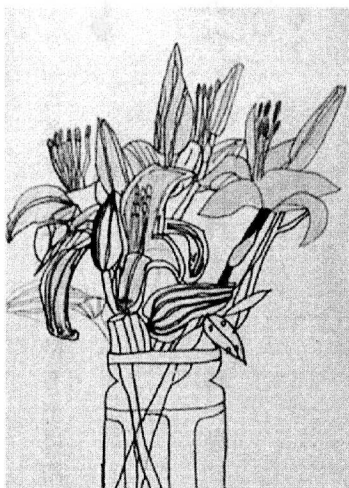
父のこと覚えてをらぬ妹よ父の膝をば常ゆづりたりしに

ちちははが共にわれらと遊びくれしは父出征の前日なりしよ

神社より峠を越ゆと征きにつつ銃持つ鬼になり得しや父は

応召し鬼となるべき父親を見送りしより経にし歳月

どぶろくは半日かけて澄んできぬ戦の世紀をわだかまれるまま



土居小学校 畑中洋人

春の光

森本 かよ子

お早やうと交はす言葉も齒切れよし春の光の
満つるあしたは

漸くに花の開く日おとづれて踊るが如し白木
蓮は

わが庭の花の王者か牡丹は白玉獅子とふ名前
に恥ぢず

空にむきすつくと伸びたる立葵淡き色よし濃
きもまた良し

おもむろに羽根をたたみて止りたる二羽の白
鷺目にしむ白さに

桜

谷名 保美

わが裡のピーナスふはり抜け出でて桜闇夜に
消えてゆきたり

桜咲くさくら色なる夜にして獣も土に四肢を
伸ばすか

溪谷の岩いだくがに伸びる根を露に見せて山
桜咲く

咲きみつる桜を星に預けおき闇は根本を占め
ゆかむとす

散る桜の下にゆだねる七十歳いつしかすべて
透明となる

拒めるいづく

関内 惇

立ち並ぶ杉の大樹のいづくまで続くや奥処に
闇を抱きて

雨をつき梅雨雲つきて競ふがに伸ぶる杉杉杉
の直立ち

老杉の秀より生れゆく霧なれば昇りゆけかし
悔なきまでに

ひたひたとわが掌に叩きてめぐる樹の幹の太
さよ重重しさよ

測らむとかひなに抱く杉の樹が拒めるごとく
匂ひだちけり



写真 小坂田 貢

この小説「母の遺言」は、町内上福原在住の、長瀬加代子さんの作品で、平成十四年度岡山県文学選奨、小説部門で受賞、平成十五年三月に刊行された「岡山の文学」誌に掲載されました。これを記念し、さらに文化協会会員に紹介しようとして本人及び「岡山の文学」誌の了解を得て本誌に転載することに致しました。

—編集委員会—

小説 母の遺言

長瀬 加代子

午後の待合室は閑散としていた。隣で文庫本を読んでいる青年と、向かい合わせに老人夫婦がいるだけで、一日中子どもの甲高い声が響く保育園とは比べようのない静けさだ。

吹きぬけの高い天井に、ステンドグラスが嵌め込まれ、美術館のホールかと思わせる明るさに、長い間、精神病院は暗く陰湿な所と思いこんでいた私は、軽い戸惑いを感じていた。

その精神病院にまさか足を運ぶことになるとは、思いもしなかった。

十日ほど前だった。日病院の事務長という女性から電話で、二宮寿美さんかと訊かれ、そうだと答えると、彼女は前置きもなく、「大河キミさんの遺品を渡したいので、病院まで来て貰えないか」といった。

「大河キミ」
すぐに誰のことか分からなく、一寸間を置いて、生後しばらくして死別した母の名前だと思い出した。私にとっては忌むしい名前だった。物心ついた頃、祖母から実母は死んだと聞かされ、もう新しい母にすっかりなっていたこともあって、実母のことは思い出すこともなかった。ところが、中学生になったある日、ふとしたことから、友達と話しているのを聞いてしまった。
「寿美ちゃんの本当のお母さん、精神病院に入っていたんだって」
「そう、狂い死にしたそうよ」

狂い死にと聞いて、気も動転するばかりで、すぐ、祖母に問い質した。

祖母は一瞬困惑した表情で、私が一歳の時、母が発病

し精神病院に入って家から去ったが、死因は肺炎だった。人の噂など気にするなと、半分怒るようがいい、いつ頃死んだかは話さなかった。祖母のことばの真偽を確かめようともせず、その日から、再び私は母のことを忘れようと思った。そして、封印してきたのだった。

母が生きていたとは、青天の霹靂だった。

「あの、そちらでお世話になっていたのですか」

「はい、うちの病院には二十年近く入院しておられました、一月三十日に亡くなりました。七十五歳でした」
丁度、一ヶ月前だ。私が四十七だから母もそれ位の年齢になるのだと思った。

「今頃になって、どうして私に——」
狐につままれたようで、問い返した。

「詳しいことはお目にかかってお話しします」

電話口で何か騒々しい気配がして、事務長は慌ただしく電話を切った。

夫は昨年他界し、一人暮らしの私には、突然降って湧いたような話を告げる相手もない。遺品が衣類のようなものなら処分してくればよい。今更、形見など欲しいと思わなかった。もう自分には関係のない人だと突っ撥ねようかと考えたが、見たくないものをそっと覗いてみたい気が起こり、一応、病院を訪ねることにした。場所は隣の地方都市だが、車で二時間少々所だった。

「二宮さま、お待たせしました」

受付嬢は、廊下の奥の小部屋に私を案内した。中に私と同年輩の女性がいた。でっぷりした身体に赤い緑のメガネをかけ、園長仲間にもこのタイプは二、三人いる。私は身体も気も小さく大きな声は出ないし、保育者としての自負はあっても堂々とした体格の人の前では物怖じする。

「小畑です。遠い所お呼び立てしてすみません。早速ですが、こちらを見て下さいませんか。大河キミさんが亡くなられた時、病室にあった遺品は保証人をしていた従妹さんに渡したのですが、先日になって金庫からこんなものが出て参りました」

小畑は二つ折りの古びて変色した封筒を、机の上に置いた。封筒の中のものを取り出すと、郵便局の定期預金証書が十三通あった。

五万、十万、五〇〇万、途中で計算を間違えそうになった。

「全部で八六〇万円あります。どうかお受け取り下さい」
小畑は、事務的にいった。

遺品が預金証書とは思いがけないことだった。

「私のこと、どうして分かりましたの」

四十七年間、大河キミの名で何の連絡もなかった。「病院でも娘さんがいらっしやることを知らなかったの

ですが、あ、その封筒に入っていないませんか」

封筒に小さく折りたたんだ便箋が残っていた。

「大河キミの娘

二宮寿美 住所 岡山市妹尾×番地」

ポールペンの文字は右上りの角張った字体で、キミが記したものでどうかは分からないが、確かに私の住所に間違いなかった。

「私の他に身内の人はいないのですか」

「私共で聞いていたのは、キミさんの従妹で高森さんという人だけでした。その高森さんもつい先日、亡くなられたそうで、実の娘さんと連絡がついてホッとしました」

小畑は、事務員が運んできた茶をすすめ、今度は、私にキミが入院していたことを本当に知らなかったかと尋ねた。幼い時にキミは亡くなったと知らされて、病院からの電話で驚いたと答えると、キミの方から連絡しなかったのは色々事情があったのだろうと、小畑は合点がいったように、一人でうなずいた。私はとにかく預金の金額にびっくりしていた。

「これは、本人が預けたのですか」

「入院の際に持ってこられたものと、入院中にご本人が預金したものを事務所の金庫に保管していたのですが、担当者が去年の暮れに退職し、申し送りが十分でなかったものですから、遅くなって申し訳ありません」

小畑は上体を窮屈そうに折って、頭を下げた。

「入院中に定期預金というのは？」

働いてもいないのに、謎だった。

「不思議にお思いでしょう。キミさんはペースメーカーをいれていた関係で、医療費が無料でした。病院に支払う費用といえば、食事代と雑費程度ですから、月々入る障害年金がいくらかずつ溜まっていたようです。キミさんは年金の受け取りに自分で郵便局へ行っていましたから、局員に定期預金のことを聞いたのでしょうか」

「預金のこと、何か話していましたか」

「さあ、聞いているとすれば部長ですが、生僧今日は出張しています。あのこれにサインを頂けませんか」

小畑は、証書の番号と金額を一覧にした領収書を用意していた。

「私が受け取るというのはどうも」

故人の遺言もなく、病院の一方的な話には躊躇した。

「娘さんに受け取って頂かないと私共が困ります」

何がなんでもという小畑の強引さに負けた。

「キミさんは、事務所に来てもいつもニコニコして穏やかな人でした。この一年前から痴呆の症状が出て、通帳を盗られたなどいわれるので、従妹さんに管理して貰っていたのですが、それまではしっかりしていて献体のことも自分から希望し手続を済ませていたようです。食べ

物を喉に詰めて残念な最期でしたが」

領収書にサインをし、印を押す私の手元を眺めながら、小畑は生前のキミについて語った。小畑の話では、キミの遺体は大学へ運ばれたらしい。

預金証書を手にしたものの、私はまだ迷っていた。キミの娘という実感が湧かない。仕方がないと思いつながら封筒をバッグにしまった。

小畑は玄関まで送って出た。道を隔てた向かいに黄色い屋根の建物と広いグラウンドが見えた。

「あれは、保育園ですか」

「はい、この病院と同じ系列の保育園です。隣に障害者の施設があったのですが、移転して跡地が運動場になりました」

私は、自分の園のことを考え、羨ましかった。夫の父が個人で作った保育園を受け継いでいるが、園庭が狭いのが悩みだった。

小畑に礼を述べ、キミが世話になった従妹の家へ寄って帰ろうと思った。

小畑が事務員にコピーさせた住宅街の地図で、高森の家はすぐ分かった。病院の近くのJRの駅から二つ目の駅前に高森商店の看板が見えた。間口一間ほどのガラス戸を開くと、土間続きの部屋で半纏を羽織った老人がこ

たつに入りテレビを見ていた。土間の両側の棚には洗剤やカップラーメンなどが並び、大して商品らしいものはない。

老人は「いらっしやい」といつてから、こっちへ顔を向けた。

「大河キミの身内の者ですが、高森さんですか」

「ああ、私だが、おたくキミちゃんの身内というと」

高森は、いぶかしげに私を見た。

「はい、娘にあたります」

はつきり娘といわず、自分でも妙だった。

「へえ、娘さんがおられたのか。まあ、上がんなさい」

私は高森に挨拶し、それから奥の部屋に見えた祭壇の前に進み手を合わせた。

「キミちゃんが迎えにきたのかと思った位、うちのも後を追うようにポックリ逝きましてな。一週間先が四十九日になります」

「奥さんには色々とお世話になったそうで、ありがとございました」

改めて高森に礼をいい、キミのことは病院から連絡があるまで知らなかったと説明した。

「そんな事情があったんですか。キミちゃんには身寄りがないというので、通帳を預かっていますな。亡くなった時、多少残金があって、キミちゃんから献体のことし

か聞いていなかったものだから、病院の先生と相談して、お寺の永代供養とあとは市の社会福祉協議会へ持っていったんですわ」

高森は、勝手なことをして済まなかったと詫びた。

そのことで訪ねたのではなく、キミが世話になったその礼をいいに寄っただけといいながら、

「こちらとは、古いつきあいだったのですか」と、訊いてみた。

「昔のことは知らんが、うちにはいつ頃だったかなあ、母親が死んだので、そのあとの身元引受人になって貰えないかといってきたのだ。病院ではなく、施設へ入っていた時分だと思う」

高森は、あまり詳しいことは知らないようだった。

高森はつと立ち上がった。二階へ駆け上る足音がして、すぐ写真一枚持って戻ってきた。

「キミちゃんにせめて線香だけでもあげようと、うちの写真を探したところ、これが出て来たのだが、二人写っているのはやめようといってね。こうして見ると、似てるなあ。こっちがキミちゃんだよ」

高森は、女が二人写っている右の方を指でおさえながら、写真を私の前に置いた。

キミは、水玉模様のワンピース姿で立っていた。おっぱ頭の丸顔で、涼しげな目をして少女の面影を残した面

立ちをしていた。私は意外に思った。長い間、精神を患っている人は大体に陰しく暗い表情をしているという先入観があった。そのイメージと全然違っている。小畑がキミのことを、いつもニコニコしていたと話していたのが少し分かった。

しかし、高森のいうように、私には似ているとは思えなかった。

「この写真、持っていていいよ」と、高森はいった。

私は素直に写真を貰った。だが、特別に嬉しいとか、懐かしいという思いはなかった。客が入って来たのを潮に、私は店を出た。

キミについて戸籍を調べたところ、キミには姉がいたが未婚のまま死亡していた。小畑のいうとおり、キミの縁者は私一人だった。キミが遺したものを受け取りはしたが、どうしていいか、ひょっとして、生前、キミが言い残したことがあれば、そのようにすべきではないかと、思いあぐねた。

三月に入り、卒園式の準備や他にも行事があり忙しい日が続いて、病院に婦長を訪ねようと思いつながら、そのままになっていった。

やっと卒園式が終わり、その日の夕方だった。知人の

通夜に出るため、少し早目に帰宅しようとしていたところへ、父母会の役員をしている笠井が急いだ様子でやってきた。笠井は小学校前で理髪店を営み、二人の子どもが通園している。さっき、笠井の妻が迎えにきたばかりで、

「忘れ物ですか」

私は、声をかけた。

「先生、その田んぼのこと耳に入っていますか」

丁度、門を入りかけていた笠井は、すぐ前を指さした。

扉続きに一反ほどの田があり、毎年レンゲの花の時期だけ持主から借りて、子どもの遊び場に使っていた。

笠井は店の客から、田の持主が手離したいといっている話を聞いて知らせに来たといった。何でも息子がサラ金で借金をして、その返済のためらしい。夫が園長時代から運動場の拡張のことは父母会でも度々話に出ているので、笠井は気にしていたのだろう。

「早く手を打った方がいいですよ」

「わざわざ、知らせて下さってありがとうございます」私は、笠井に感謝した。

寝たきり老人の所へ、出前散髪に行く途中だという笠井を見送り、花にはまだ間のある青々とした田に目をやりながら、私はぐずぐずしていられないと思った。このあたりは、最近新築の家が次々と建ち、農地が少なくなっ

た。笠井が知らせてくれた話を見逃す訳にはいかない。

いい話だった。しかし、先立つものを考えると頭が痛い。園の母体は一応法人の形になっているが、やりくりするのは園長の才覚による。夫が全てやってきた運営を引き継いだものの、私には荷が重くてこんな時が一番困る。

ふっと、キミの遺したものが脳裏をかすめた。何れにしても早く病院に行って話を聞こうと、頭の中で予定を練った。

「一寸、うるさいかも知れませんが、部屋がなくて」

ナースステーションの奥の衝立のかけに、小さな応接セットがあり、婦長は、窓際の方に私を座らせた。

婦長は四十歳位の、物静かな色白の人だった。

「お聞き及びかと思いますが、キミは多額の預金を残しています、生前、そのことで何か話していなかったでしょうか」

私は、その扱いに困っていると切り出した。

「私がこの病棟を担当したのは六年前ですが、キミさんに定期預金があるのを知りませんでした。もともと口数が少なく、若い頃のことを聞いても話したがらず、病院の支払いは自分でしていたので、私共ではお金に関してタッチしていません。ただ一度、婦長さん、老人病棟へ移ったらかなり費用が要るそうだが、自分の年金で大

丈夫かと、訊ねにこられたことがあります。キミさんは、最後までこの病院にいるつもりの方でした。老人ホームをすすめるのと、頼むからここに置いてくれと、珍しく強い口調だったのでびっくりしました」

「老人病棟はそんなにかかるのですか」

両親も夫も五十代で逝ったため、私は老人病棟について知らなかった。

「介護保険制度が出来る前は、おむつ代や介護料など、かなり費用がかかっていましたが、今はそれほどではありません。でも、キミさんに限らず皆さんは、老人病棟に入ると、大分お金がいると思っっているようです。それで心配なのでしょうね」

婦長は、きれいな歯を見せて笑った。

「患者さんの中には、無駄遣いをする人もいますが、キミさんは売店で洗剤や日用品を買う程度で、お菓子も食べられませんでした」

婦長は、病院の日課を説明し、洗濯は自分で出来る者は家庭と同じようなやり方だと話した。妄想や幻覚があっても、日常の細々したことは出来るし、キミにも人の声が聞こえるという幻聴がなかなか取れないため、入院が長くなったのだと、婦長は経過を述べた。

「それにしても、キミさんは先のことですが、そんなに心配だったのでしょうかねえ」

婦長は、首を傾げて、
「お守りにしていたのかも知れませんが」と、いった。

「お守りですか」

「そんな気がします。お金を持っていると安心だったのでしょうか。死んだあとどうするか、そこまでの考えはなかったと思います」

本当にそうだったのか、婦長のいうように、世間には老後に備えてせっせと蓄財しているという話はよくある。キミが故人となつては、もう尋ねるすべもない。

「もし、キミさんが遺言を残すつもりでしたとしても、この一年、もの忘れがひどくて定期預金のことなど覚えてなかったでしょうね。でも、娘さんに渡って本当によかったですわ」

婦長は、小畑と同じことをいった。

「キミさんがいた部屋を、ご覧になりますか。別の人が入っていたのですが、丁度、今朝退院して空いていますから」

婦長は、私の返事を待たずに先に立った。

詰所を出ると広い廊下がのびて、両側に病室が並んでいた。

婦長は一番奥の部屋のドアを中に押し開いて、「どうぞ」といった。

ベッドの横に、壁に嵌めこみのロッカーがあり、小さな机もついて、まるでホテルのような部屋である。出窓の下にさくら草の鉢が置かれ、木目調の床はきれいに磨いてあった。

「全員、個室ですか」

「いえ、この病棟は一応外への出入りが自由で、一人部屋と二人部屋になっていますが、症状によって入口だけ鍵をかける病棟の方は、大部屋です」

婦長の説明を聞きながら、キミが終生、ここにいたいと希望したのが分かるような気がして、そういうと、

「いくらきれいでも、病院には変わりないですから、長くいる患者さんを見ると切なくて」

婦長は、小さく微笑した。

優しい人だと思った。ふと、私はキミの発病時のことを訊いてみたくなった。乳飲子を手離れた事情が分かれば、キミに対する思いが変わってくるかもしれない。私は、精神病というだけで、キミにいい感じを持ってこなかった。

古いカルテを見ないと分からないが、病気のために赤ん坊を夫の許に残して離婚になるケースはいくつか知っているのと、婦長はいった。幻聴や妄想がひどくなると、その症状に振り回されて、子どもの世話が出来なくなり、入院したり実家へ戻されて、それで別れ話になる。そん

な例を聞くと、私にもおおよその見当がついて、キミが哀れに思えてきた。

キミの遺産について、何の手がかりもなかったが、私は、婦長に会えてよかったと思った。

廊下の向こうで、「婦長さん」と呼ぶ声が聞こえた。

法人の理事会で土地を購入することは決まったが、寄附金を集めるか、借金するかについては、はっきりせず、結論は保留になった。

キミの遺産を寄附金として扱えば、解決するが、私の中ではまだ踏ん切りがつかず、そのままになっていた。五月の連休の初め、病院の婦長から古いカルテの写しが届いた。

「生活歴

本籍地で出生。女学校卒業後、兵庫県N市で見習い教員をしていた。二十七歳頃より異常行動が見られるようになり、N市矢倉病院に入退院。四十四歳の時、愛の家施設入所。昭和五十六年四月、うつ状態にて当院受診。そのまま入院となる」

結婚歴の欄は離婚に印がついていた。その他に婦長の手紙が添えてあった。

「古いカルテが見付からず、何冊目かのカルテについていた生活歴を見ましたが、やはり詳しいことは分かりま

せんでした。入院する前にいた施設に問い合わせたとこ
ろ、移転の時の古い入所者の記録を紛失したそうです。

施設でキミさんを担当していた職員の仕事をお知らせし
ますので、もし、必要があればそちらにお尋ね下さい」

私には、もうキミの発病時のことは、それほど調べた
いという気持ちはなかった。ただ、キミが何を考えてい
たか知りたくて、それが分かれば、遺産の使い道もはっ
きりすると思った。

婦長の手紙に促されるように、連休の中日、私は施設
の職員だったという桐野を訪ねた。

桐野の家は、日病院と同じ市内の郊外にあった。田園
地帯の高台に土塀をめぐらせた旧家で、桐野は庭の草む
しりをしていた。三年前、定年で退職した直後に脳こう
そくで倒れ、左半身に少しマヒが残っているといい、歩
く際、足を引き摺ったが、人の良さそうな人物に見えた。
「キミさんは、よく覚えています。丸顔の可愛らしい人
でしょう。皆からキミちゃんと呼ばれていましたよ。施
設からあちこちへ仕事に出していたのですが、キミさん
は保育園の雑役をしましてね、そこでも保母さんか
ら可愛がられて、随分長く勤めました。十年以上は働い
たと思います」

「どちらの保育園に」

県外だから知る筈もないのに、私はハッとした。

「病院に行かれた時、見えたでしょう。前の建物です。
施設と隣合わせで、通うのには便利でした」

「お給料は出ていたのですか」

「わずかな手当てだけです。日病院に入院する半年ほど前
でしたか、母親が亡くなってキミさんに生命保険金が入
りましてね。金持ちになったのだから、アパートに入る
かという時、一人でくらすのは淋しいと反対されました。

保険金は定期預金にしました」

桐野は、急に私を見据えた。

「キミさんのもの、受け取りましたか」

「はい、受け取りました」

私は、尋問に答えるような短い返事をした。私の方か
らしい出す前に、桐野から訊かれ、一寸、うろたえた。

「それはよかった」

桐野の目が和んだ。

施設で、年金や生活保護費をためていた人が亡くなる
と、それ迄、一度も顔を出したことの無い親戚が現れて、
全て持ち帰るのだそう。その話をしながら、桐野は
「釈然としない」といった。

私は、思わず目を伏せた。

「私も同じです。何もしていない者が、そっくり受け取っ
ていいものか」

私が迷っていた一つに、この負い目があった。母を恋

う気持ちがあれば、生死など調べれば分かるのに母捜し
をしなかった。どうしても会いたいと思わなかった。何
故かと問われると、うまく説明出来ない。中学生の時に
受けたショックが長く尾を引いていたことは事実だった。

「あ、私のいい方が抽かった。キミさんから聞いたので
すが、何でも子どもが小学校に入学する時、キミさんは
別れた子どもに会わせてくれと夫に頼んだそうです。す
ると、母親は死んだことになっているといわれ、だから、
娘に連絡出来なかった。あなたも同じ事情で、仕方のな
いことだった。苦にすることはありませんよ」

いつの間にか、白い猫が桐野の膝の上に乗っていて、桐野
は猫の背をなでながら、私を慰めた。

「しかし、キミさんは預金のこと、どうして黙っていた
のだろうな。本当に誰も聞いてないのですか」

桐野は、不思議がった。

預金証書の袋に、娘の住所だけ記したものが入ってい
たと告げると、桐野は、ポンと右手で膝を叩いた。猫が
びっくりして庭へとびおりた。

「それがキミさんの遺言ですよ。本当にあなたがいてよ
かった。相続する者がいないと、国庫に入ってしまうの
だから」

桐野は、よかったと繰り返し返しながら、
「やっぱり、遺言は必要ですね。私の所は子どもがいな

くて、この広い屋敷と家をどうするか、家内と話してい
るのですが。あれ、どこに行ったのか、お茶も出さず
に」

「おい、おい」と声をかけていたが、返事はなかった。

桐野と話をしたことで、私は、ようやく迷いがふっ切
れた。

キミに何か夢があったとは思えないし、保育園のため
なら、キミとも縁があるので、故人も喜ぶだろうと、桐
野は私の計画に賛成した。本当に、キミの遺産は有難かつ
た。

キミが、どんな思いで金を遺してきたか、結局、私に
は分からずじまいだった。それでも、湯船につかりなが
ら、時には床に入って天井を眺め、キミのことを考えた。
婦長や桐野の話だけでは、キミの姿がおぼろげにしか浮
かんでこない。

土地の相続も終わり、梅雨あけのニュースを聞いた日、
ポストに婦長からの手紙が入っていた。私はその場で封
を切った。

病院の四十周年記念誌を作るため、古い文集を見てい
たら、キミの短歌が載っていて、それを書き写したもの
だと前置きがあり、二十首ばかり歌が並んでいた。

キミに、歌を詠む趣味があったのは知らず、豊かな感

性に驚いたという感想もついて、私は一気に目を走らせた。

農園の帰る道々よもぎ摘み
母のぬくもり思い浮べる

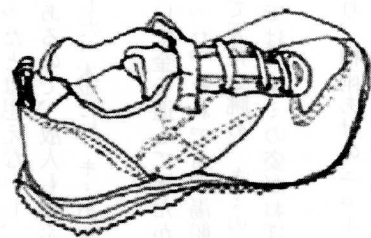
母の日に在りし日のこと懐かしみ
形見のモンペとり出してはく

亡き母の家こわすの知らせあり
よるべなき我帰る場所なし

鳥鳴き帰る家路は山里か
夕焼空に鳥影二つ

母逝きて十年経つもまだ恋し
夢に出てきて声も聞かせて

母を詠んだ歌ばかりだった。私は二度目は声に出して読んだ。読みながら「お母さん」とキミの呼ぶ声が聞こえてくるような気がして、あたりを見回すと、すでに薄暗く、玄関のガラス戸に映った夕日の残照の中に、私は一人立ち尽くしていた。



土居小学校 石原舞帆

専門部活動報告

棋道部の活動について

横山 廣志

碁打ちとは、親の死目に逢えない

それは江戸時代のこと、城下街の囲碁チャンピオン・準チャンピオンは、年に一度お城に行き殿様の前で対局することになる、いわゆる天覧試合のようなものである。そして一か月間お城から出ることを禁じられそれに専念する。たとえ親が他界しようとも立ちあうこともできず、お城に結めなければならなかったということなのです。

囲碁の対局練習

日常囲碁を打ちたくても、近所に行って碁を打つ相手や暇も少ない、されど碁会所も町内にはない。そこで、江見のスパーマーケット「エミイ」では某篤志家のご協力により碁盤を新調していただき、水・土・日曜日の午後愛好者が相集い囲碁を打っている。粟井教育集会所では、毎月曜日の午後を対局日としている。

囲碁大会

各町村の文化協会や、美作町の民間碁会所で定期的に大会が開催され町内からも参加している。本町では粟井の双山囲碁クラブが近隣市町村を対象に年三回開催して

おり、本年四月には、第九十回を迎えることになった。毎回三十名前後の参加者で初・中・上級者有段者が集い二ランク(A・B)に別れて対局する。少数ではあるが女性の参加も時々みられる。

双山囲碁大会の沿革と語源

万葉集に詠まれている小野の能登香山は、その形状から「双子山」(ふたごやま)と呼ばれ「龍王様」(水神)「速風様」(風神)の神々が祭られ粟井地区のシンボルとして愛されてきた。その山の名称を冠し、双山(そうざん) 囲碁大会と命名した。大会は昭和二十五年頃粟井村時代に始まり村内の愛好者仲間に対局された。昭和四十八年から第一回双山囲碁大会と銘打ち近隣市町村に呼びかけ、本年四月第九十回を迎えた。

プロ棋士の招へい

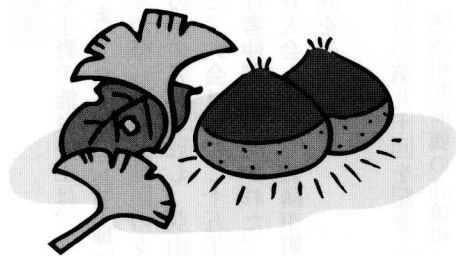
双山囲碁クラブは、節目の第九十回を記念してプロ棋士との対局を企画した。関西棋院所属の高橋棋士(五段)です。先生は大手合戦で優勝の経験もお持ちです。ご出身は香川県小豆島で現在は池田市にお住まいです。超美人の奥様は隣町大原町沢田のご出身で池田市で囲碁塾をされております。今回、先生とご同伴いただき対局もしていただきました。大会終了後、当日の優勝戦の棋譜を大盤で解説していただき、さらに、数人の方(素人二段から六段)が三子から五子の置碁で対局しましたが残念

ながら誰も勝つことはできませんでした。プロ棋士の真髓を見せつけられました。

前後しましたが今回の企画にご賛同いただき物心両面にわたりご支援をいただいた皆々様に借越ですが紙面をお借りしてお礼申し上げます。

後継者づくりと囲碁教室

田舎での囲碁人口は、かなり減少しており、若者の碁打ちが育ちません。かねて後継者づくりのため、小中学生の指導を試みたりと思っていたところ、時あたかも「ヒカルの碁」がマンガ本・テレビで放映され小中学生の囲碁の関心が高まっております。昨年の夏休みより公民館で囲碁教室を始めていますが課題も多くありますが継続することが必要と思っております。そして作東町から本因坊、名人が生れることを期待したいものです。



作東町文化協会会則

(名称)

第一条 本会は作東町文化協会と称する。

(目的)

第二条 本会は作東町民の文化生活の向上を期すると共に、会員相互の親睦を図ることを目的とする。

(事務所)

第三条 本会の事務所は作東町教育委員会事務局内におく。

(事業)

第四条 本会は第二条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 一 講演会・研究会・展覧会等の開催。
- 二 文化誌などの発行。
- 三 その他文化の推進に関する事業。

(会員)

第五条 第二条の趣旨に賛同し本会の事業を推進する者を会員とする。

(組織)

第六条 本会に部及び支部をつくることができる。

(役員)

第七条 本会に次の役員をおく。

会長 一名、副会長 二名、理事、部長、
副部長、支部長、評議員 若干名、監事二名

(役員 の任務)

- 第八条
- 一 会長は会を代表し会務を総括する。
 - 二 副会長は会長を補佐し会長に支障があった場合は会務を代行する。
 - 三 理事は会務をつかさどる。
 - 四 部長は部を総括し副部長は部長を補佐する。
 - 五 支部長は会務をつかさどり支部の振興を図る。
 - 六 評議員は運営について協議する。
 - 七 監事は会計を監査する。

(役員 の選出)

- 第九条 会長・副会長は理事会で選出し総会で承認を受ける。
- 二 監事は総会において選出する。
 - 三 理事は部長・副部長・支部長をもってあてる。
 - 四 部長・副部長は部で、支部長は支部において選任する。
 - 五 評議員は部長・支部長が推薦し理事会にお

平成14年度 作東町文化協会事業報告

【全体事業】

年	月	日	事業名	内容
14	4	22	第1回理事会	14年度事業計画・会員募集について
	5	10	専門部役員会	専門部行事計画・予算配分について
	5	10	第1回編集委員会	編集委員長選任・編集方針について
	5	28	勝英2郡文化協会総会	英田町公民館/13年度事業決算、14年行事計画案について
	6	5	第2回理事会	研修旅行・原稿募集・文化展について
	8	9	第2回編集委員会	以降3回開催(8/29、9/19、9/27)
	9	28	研修旅行	丹波篠山方面
	10	15	文化誌28発刊	会員全体に配付
	10	22	文化展打ち合わせ会	部門別出展数及び配置について
	10	25	役員会	文化を語る会について
	10	25	文化展準備	会場設営・作品搬入
	10	26	文化展	海洋センター/26日～27日まで
	11	7	作東の文化を語る会	町長を囲んで文化を語る
15	1	24	第3回理事会	春の書画写真展について
	3	4	第4回理事会	総会について
	3	29	春の書画写真展	改善センター/30日まで
	3	30	文化講演会	バレンタインプラザ

【各専門部・支部活動】

年	月	日	部名	内容
14	4	14	茶華道部(茶道)	お花見茶会 王道の庭
	4	7	棋道部	双山囲碁大会 粟井地区センター 以降8月18日、1月12日開催
	4	27	芸能部	よしもと湯郷公演前座出演
	4	11	写真部	役員会
	4	7	園芸部	高知県より 山野草交流会24名 きんちゃい館にて 以降7月
	4	8	園芸部	春の山野草展
	5	2	絵画部(洋画部)	春の作品展 バレンタインプラザ/2日～6日
	5	19	園芸部	講習会 寄せ植え12名 鉢作り18名 つづら籠作り15名
	6	17	園芸部	溝口町より 山野草交流会
	6	18	写真部	撮影会 以降10月24日
	6	19	絵画部(日本画)	県北美術展出展 津山市 ～24日
	7	1	絵画部(洋画部)	小品展 バレンタインプラザ
	7	19	園芸部	落合町より 山野草交流会(つづら籠作り)26名 以降9月
	7	29	園芸部	大阪箕面小学校 つづら籠作り 粟井研修センター 48名
	8	3	茶華道部(茶華道)	サマーバレンタイン花展・茶席 バレンタインプラザ
	8	25	陶芸部(陶芸)	陶芸教室 圓光室 ～26日
	9	7	茶華道部(茶道)	お月見茶会 バレンタインプラザ
	9	4	情報映像部	パソコンサークル(ネットサークル)
	9	15	芸能部	作東町敬老会に「舞の会」出演
	9	19	情報映像部	パソコン・インターネット講座 粟井地区センター
	9	21	書道部	白雲書道展 バレンタインプラザ/9月23日まで
	10	6	土居支部	研修旅行 琵琶湖博物館～大原三千院開帳へ 参加者45名
	11	2	江見支部・豊野支部	研修旅行 島根方面
	11	9	土居支部	文化展
	11	19	吉野支部	研修旅行
15	2	4	写真部	研修会
	2	9	演芸部	バレンタイン祭 つづら籠講習会55名・バレンタイン賞贈呈
	3	23	粟井支部	研修旅行
			芸能部	第5回舞の会(4月6日)
			歴史部	古文書を読む会 毎月第3金曜日 午後1:30～
			文芸部	川柳同好会 奇数月最終水曜日例会 午後2:00～
			絵画部(日本画)	こぶし会/第2土午後1:00～ さつき会/第2・第4木午前9:00～江地セ
			茶華道部(華道)	役場窓口・公民館への展示
			手芸部	中央公民館 毎週月曜、毎月第2・第4水曜9:00～12:00
			情報映像部	文化協会HP更新
			棋道部	練習 ショッピングセンターエミー/毎週水・土・日 午後1時より
			棋道部	粟井小学校囲碁教室 随時
			棋道部	囲碁教室(小中学生)7月より 公民館/毎週土曜日10:00より
			粟井支部	役員会 年5～6回
			絵画部(洋画)	絵画教室/環境改善センター 第1・3土曜日午後1:00～
			書道・手芸・短歌・歴史・情報映像	愛寿大学趣味の講座 7・9・10・11・12・1・3月開催
			各専門部	プラザ両側面へ展示

第十四条 本会の経費は会費・賛助金・町よりの事業委

(経費) 二 評議員会を以て総会に代えることができる。
三 理事会は年四回開催する。但し必要に応じて臨時理事会を開催することができる。

第十三条 総会は毎年一回開催する。但し必要に応じて

(会議) 会長は理事会の承認を得て臨時総会を開催することができる。
二 評議員会を以て総会に代えることができる。
三 理事会は年四回開催する。但し必要に応じて臨時理事会を開催することができる。

第十二条 本会に顧問・特別顧問及び参与を置くことが

(顧問・特別顧問及び参与) できる。顧問・特別顧問及び参与は総会の同意を得て会長が委嘱する。

第十一条 役員は二年とする。但し再選を妨げない。

(役員) 役員は二年とする。但し再選を妨げない。

第十条 事務担当者は会長が委嘱する。
第九條 役員は二年とする。但し再選を妨げない。

六 任期中途の補充役員は理事会において選任

託料・その他をもってあてる。

(会計年度)

第十五条 本会の会計年度は毎年四月一日に始まり三月三十一日をもって終わる。

(会則の改正)

第十六条 この会則は、総会の議決により改正をすることができる。

(附則)

一 会員は年額一口千円の会費を納入するものとする。

二 部会は書道・絵画・園芸・茶華道・文芸・歴史・写真・陶芸・芸能・棋道・情報映像・手芸とする。

三 この会則は昭和六十三年四月一日より施行する。
四 平成十年三月二十九日会則一部改正 平成十年四月一日より施行する。

五 平成十一年三月二十一日会則一部改正 平成十一年四月一日より施行する。

六 平成十四年三月二十四日会則一部改正 平成十四年四月一日より施行する。

編集後記

長瀬加代子さんの岡山県文学選奨受賞は、平成4年度に五名の横山猛さんが「慙慙の冬」で短歌部門受賞以来会員としては11年ぶりの快挙といえます。

このことは、わが文化協会の大きな誇りとするところです。

特別企画として掲載したことによって本誌に重厚さを加えたと思っています。

又、ここ数年短文芸以外の文章表現による作品が少なくさびしい思いをしていましたが、本年はそれが20点を数え、充実した内容となりました。投稿者各位に、深く敬意を表します。

本誌と文化協会発展に向かって、文芸愛好者の皆さんのさらなる奮闘を期待します。

編集委員会

作 東 の 文 化

第 29 号

平成 15 年 10 月 15 日発行

.....
編 集 作東町文化協会文化誌編集委員会
岡山県英田郡作東町教育委員会内
編集委員 谷口重人 安東琢之 安東靖雄
上山克巳 小坂田貢 原 洋一
三木忠司 横山 猛
発 行 所 作東町文化協会
岡山県英田郡作東町教育委員会内
☎ (0868) 75-1111 〒709-4292
印 刷 所 株式会社 廣陽本社
岡山県津山市田町 22
H P ア ド レ ス <http://www.n-love.net/~bunka/>